

街づくり先進地視察研修 彦根・長浜

平成11年9月3日(金)～6日(月)

報告書



なまえ 松坂 用

島原中心市街地街づくり推進協議会・視察研修事業
長崎県地域づくり特使派遣事業(森岳まちづくりの会)

街づくり先進地視察研修 行程概要

○日 時：平成11年9月3（日）（金）夕方出発～6日（月）朝帰宅

○視察地：滋賀県彦根市長浜市

○主 題：環境問題を商店街活性化に役立てる（彦根市：登り町・銀座）

街並み形成（彦根市：キャッスルロード 長浜市：御坊表参道）

既存建築物の再生、活用（彦根市：花菖蒲通り 長浜市：黒壁）

TMOの可能性（彦根市、長浜市）

他にもこの事例地は、いろんな参考例が含まれる。

9月3日（金）午後6時島原駅集合（出発式）

見送り：（都市整備課）島崎課長・酒川様・森川様（推進協議会）北村様・末永様
（森岳）安藤様・ごいんきょさん他

18:10 島原駅発～19:20 諫早着 長崎組（矢部・嘉村・中山）合流

19:57 諫早発寝台特急あかつき～ 見送り：古瀬推進協議会長・村本森岳前代表

9月4日（土）7:54 京都着 乗り換えて東海道本線彦根へ（新快速）

彦根視察

10時～彦根商工会議所にて現地説明

- ・会議所安達昇様様
- ・登り町グリーン通り商店街振興組合会長小椋政昭様・事務局中村泰始様

夕刻まで現地視察（昼食各自）

宿泊先にて 夕刻6時～反省会・現地商店街の方たちと懇談会

宿泊先：とばや（河原3丁目1-23）TEL：0749-22-0325

9月5日（日） 朝から移動 彦根長浜間（JR琵琶湖線で）約30分。

長浜視察

黒壁～大通寺、現地視察。

11時～お花館事務所にて現地説明

- ・御坊表参道通り 小倉勝彦様
- ・長浜商工会議所 吉井茂人様

再び現地視察（昼食夕食各自）夕刻までに各自京都へ移動

20:32 京都発あかつき号～

9月6日（月）8:11 諫早着（8:36 諫早発～9:50 島原着）

「彦根・長浜」視察研修 経緯 (再録)

左ページに主題を列記しておりますが、ここに至った経緯と、今回の視察の注意点を説明申し上げます。正確に言うと、今回の視察は、

- 1, 長崎県地域づくり特使 (県外派遣) 事業と
 - 2, 島原中心市街地街づくり推進協議会の視察研修事業の
- 二つを合同で行うものであります。

特使事業は、森岳まちづくりの会代表 (小川) に与えられた使命で、森岳まちづくりの会では、近頃折に触れて考えている「環境問題とまちづくり」=「ゴミのない街」をテーマにして、彦根市で行われている、空き缶ペットボトル回収機による取り組みを調べることにしました。森岳まちづくりの会会員が主たる構成員になっている街づくり推進協議会の五つの委員会の中の「森岳地区協定研究会」では、四年前に同じ彦根長浜を訪問した経緯があるので、特使事業に相乗りすることに決定しました。

一方、街づくり推進協議会では、中央公園が完成したもののその維持管理 (美化) をどうするか、国光屋跡地をどうするか、等々問題は山積みであるのに、本来主体的に関わるべき商店街メンバーが街づくり推進協議会から離れて行きつつあり、推進協議会設立以来新しくメンバーを補充することもしてこなかったため、この機会に「街づくりの主役は商店街」ということを再認識してもらおうと、特に商店街若手会員を重点的に呼びかけて視察研修事業を企画しました。

ガマダスのあと平成14年度以降を考えると TMO の問題は早めに計画しなくてはならないので、この度は熱心な市、県の担当者も交えて TMO 先進地でもある彦根、長浜を視察地に選びました。

注意点と課題

レポートの提出が義務づけられています!

推進協議会から助成をしています。参加できないメンバーに対しての報告義務がありますので、9月20日までにレポートを提出して下さい。(会議所未永まで)。

そのまま印刷しますので A 4 縦位置横書き (このしおりと同じ形式) でペン書き又はワープロなどをお願いします。各自テーマを持って取材して下さい。

枚数は1枚以上、20枚以内。写真や図をつけても結構です。

団体行動をとる場所と時間 (必修科目)

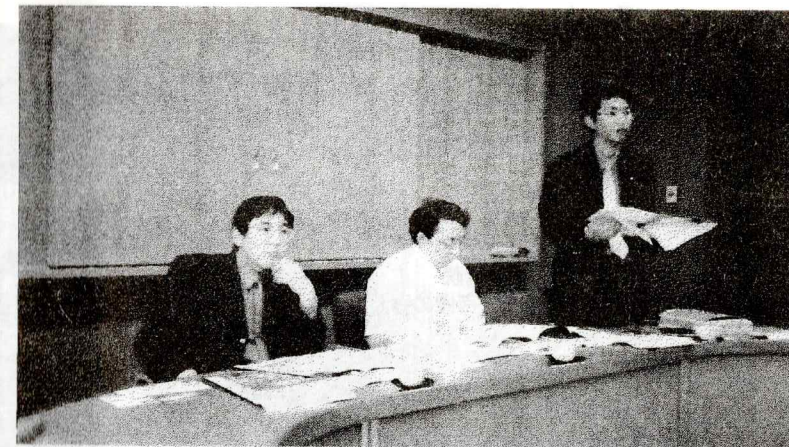
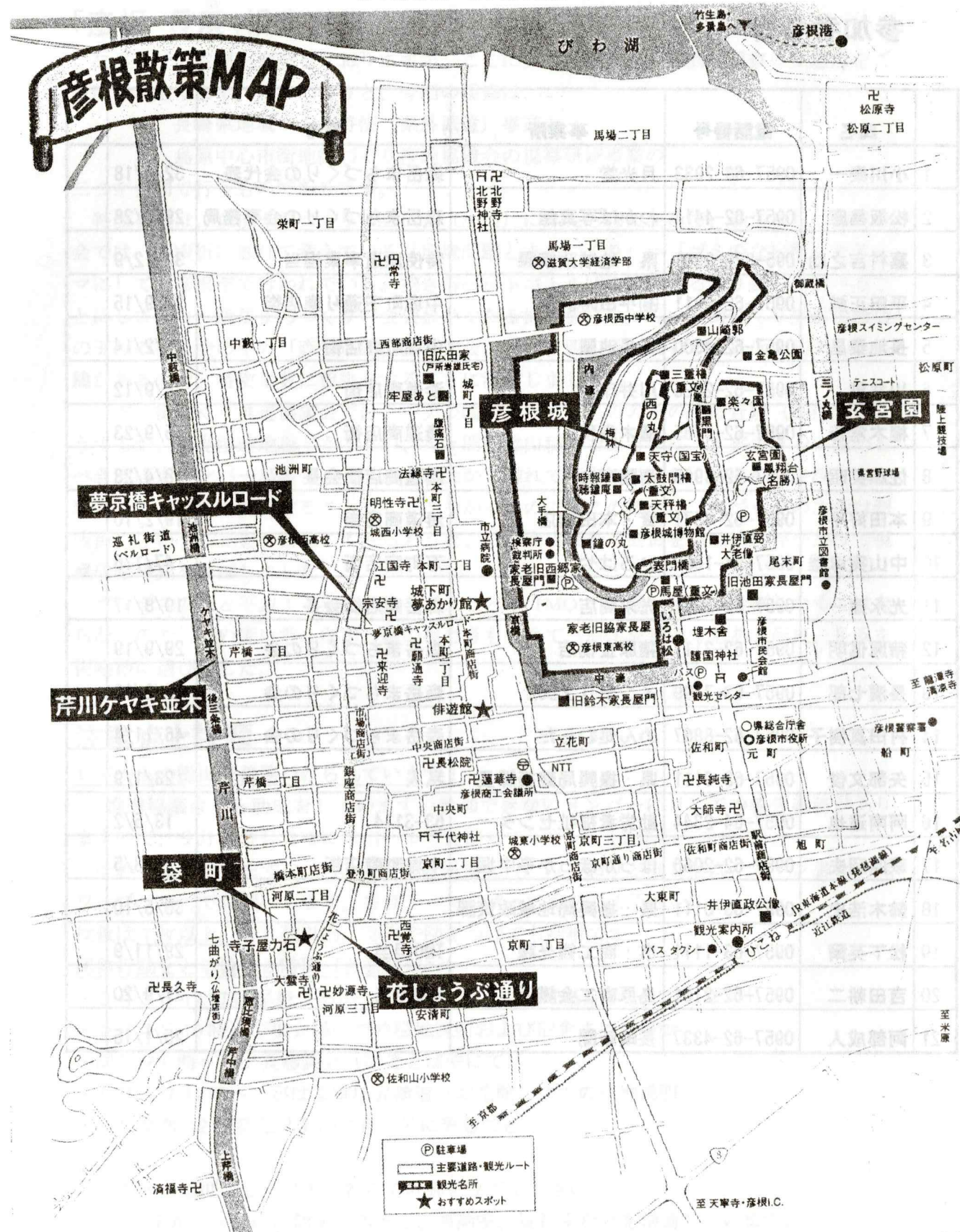
- ・ 9月3日 19:57 諫早発「あかつき」号に乗ること (指定券を配布します)
- ・ 9月4日 10時～彦根会議所での現地説明および宿舎までの移動
- ・ 同日夕6時～の夕食懇談会 (宿舎とばやにて)
- ・ 9月5日 11時～ながはま御坊表参道「お花館」にての現地説明
- ・ 同日夕20:32 京都発「あかつき」号に乗ること

※他は原則として自由 (各自で計画を立てて下さい)

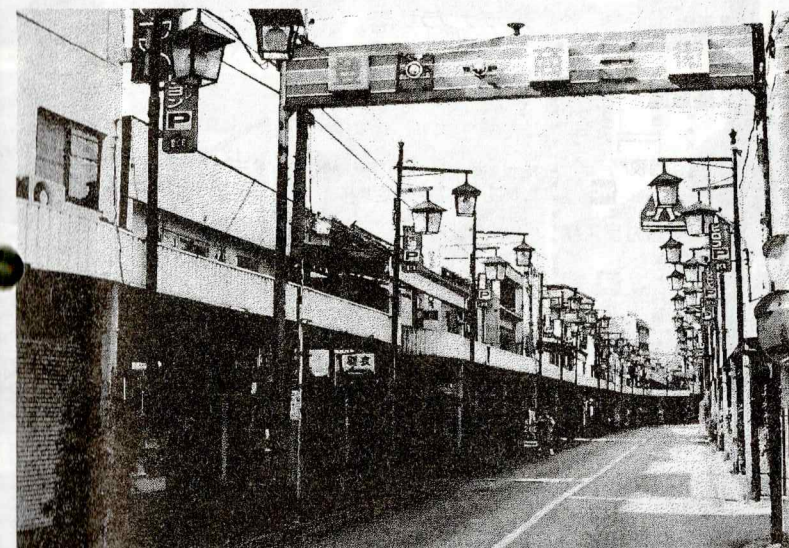
- ・ 「あかつき」には個室があって、談話室、資料室などを準備しています。
- ・ 服装は軽装で結構です。(旅行者の格好で訪問すると先方には伝えてあります。)

参加者名簿

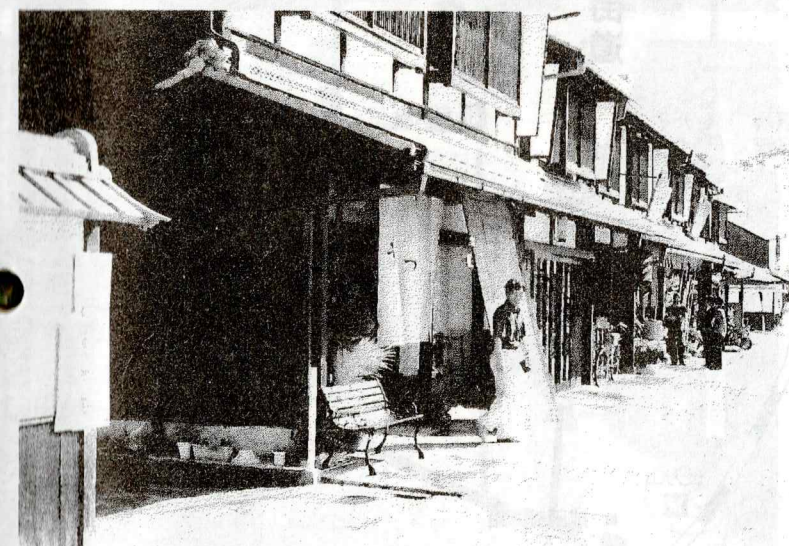
	氏名	電話番号	事業所	備考		
1	小川泰一	0957-63-2933	月光堂	森岳まちづくりの会代表	32/6/18	
2	松坂昌應	0957-62-4414	わかば写真館	森岳まちづくりの会事務局	29/4/28	
3	嘉村吉之助	095-826-9645	県：地域政策課	特使派遣事業担当	32/12/9	
4	平田正誠	0957-62-3911	(有)平田時計店	中堀町下通り商店街	23/9/15	
5	長池泰昌	0957-62-4500	(株)長池屋	中堀町商店街	48/2/14	
6	川井勲	0957-62-2326	川井印房	湊道商店街	5/9/12	
7	植木常恭	0957-62-3765	植木歯科	湊道商店街	5/9/23	
8	佐藤英昭	0957-62-3965	南陽商会	湊道商店街会長	18/4/28	
9	本田好平	0957-62-4571	資・本田商店	湊道商店街	19/2/10	
10	中山実津雄	0957-64-1688	いろはや	万町商店街	47/1/6	
11	光永建一	0957-62-2291	光永商店	森岳商店街会長	19/8/17	
12	猪原信明	0957-62-3117	猪原金物店	森岳まちづくりの会	29/9/19	
13	長濱七郎	0957-63-7799	インテリアBOX	森岳まちづくりの会	15/2/10	
14	村田真樹子	0957-62-8867	めん処むらた	森岳まちづくりの会	46/11/4	
15	矢部文俊	0957-63-0111	県：振興局建築課長	私人	23/1/9	
16	阿南達也	0957-64-2344	勤労者福祉センター	63-3114	13/5/2	
17	萩原昭夫	0957-62-2066	ほっかほっか亭中堀	中堀町商店街	3/3/5	
18	鈴木浩史	0957-63-0111	県：振興局地域政策課		35/5/10	
19	松下英爾	0957-63-1111	市：商工観光課	TMO担当	29/11/9	
20	吉田耕二	0957-62-2101	島原商工会議所	TMO担当	21/9/20	
21	阿部成人	0957-62-4337	長崎新聞		25/1/15	



彦根会議所にて(小椋, 中村, 宇達氏)



登り町・花菖蒲の街 (歩道にケナフが並ぶ)



夢京橋キャッスルどりの一部



彦根城からキャッスルどりを
銀座どりを経て
登り町・花菖蒲の交差点であります。



空缶回収機

彦根・長浜視察研修

湊道商店街 本田好平

前日に送られてきたパンフレットを見て半ば観光旅行
への気分はふっとんでしまった。何年ぶりの夜行寢台
ではほとんど寝れず京都着。乗りかえて彦根へ
彦根商工会議所での現地説明も疲れてとろ
どろしか頭にのこらない。中心地からはずれた
商店街を見えようと思っていたが、名物の商店街
があるということどどこが中心なのかよくわからず、
彦根城へと続く夢京橋キャスロードは昔の街並
再現しすばらしい通りが出来ているが、どこかの
テーマパークの中を歩いている様な感じがしてきて
そぞろ歩いている若者や観光客の心も長くとど
まれるかという心配もする。

既存の商店街では私共と同じ悩みをもって
活動を展開され、学生が商店街活動に参加
したり、空き缶のリサイクルに取り組みだりとユニーク
で参考になるものばかりであった。

夜の懇談会では疲れも忘れ夜更けまで悩みを
語りあい、お互いへの質問もとがかった。

次の日は長浜視察。

米原からは電車は満員になりほとんど誰も
長浜で下車。こちらでは古い屋並みが多く
残りそれを生かした街づくりがされており

充分に旅行者の心をとらえている様に見える。
私達の歩く速度も遅くなる。これと言った名物
は見当りなかったが琵琶湖アユの佃煮と
有田の湯呑みと土産に買った。

表参道商店街の理事長と長浜商工会議所
の課長の現地説明ではいっしょに次から次へ
と出てうなづく事ばかりだったが後でじっくり
テープでも聞かないと理解は出来ないうらう。
あかつき出発までは時間があり同じ商店街
の人と京都観光地めぐりをたのしんだ。

やはり日本人の心のふるさとであり彦根も長浜も
近く京都があることで街づくりの方向性
も見えてくると思われた。



彦根市

よく整備された城下町の商店街古い様子を継承しながらも現代的セシスの町並づくり
彦根城近くの夢系橋キャッスルロード、古き良
き下町風情と城下町の佇まいを残す花いよう
ぶ通り、昔懐かしい駄菓子屋、石まち
のシンボル巨大壁面花町の面影を残す袋町
建物色を一色にしている街並作りなど印象的
だった。彦根城、天守閣からの見下す景観、玄宮
園庭園など見るだった。

街路の幅を広く観光買物にも便利な標に思わ
れる。鰻細工、駄菓子店など珍うしかつた。仙
壇店も地場産業のせりが多い標だった。
A.C.下の活版屋、十フ栽培室、缶、ペットボトル
のリサイクル
みかんのまち作り、子葉城代町の町割り、T.M.C
子葉舞臺、進シンボルロード整備、子葉、整然と
した街路整備町の活性化が住民主導行政アド
バイザー役という説明も印象的だった。
食としては近江牛は美味だった。

長浜市

こゝも整然とした街並み、黒壁の商店街古さと
近代性混合が興味をそゝる。黒壁がウス
館表参道通りはかなりの観光客が目についた。
白壁、格子、瓦葺みの伝統的な町並みの復活は
ながくのもの。地場産業もないガラス工
芸、ガラス工房と工夫のあとがうかがえる。
黒壁、景観と商業性、将来への方行性、実行との説
明もあり。こゝは彦根と異つて過大な投資を
しないう民間各商店の投資によつて近代化形成

をはかつていふとの熱のある建議であつた。
それと夢のあるプラン作りにばげんしている
のみ
両市とも魅力的な街づくりと景観形成には並
々ならぬ努力がみられる。特に商店街の方々の
協力、協調は高く評価すべきである。
たゞ後継者問題には悩みを持っている所だ

島原市も民間主導役所はアドバイザー的な存在として両市を見習って今後の市の発展を考えていくべきだろう。

今でも観光客が来ているという商店街、
銀水及びその周辺の水の各所、水屋敷の活用は考えられないものだろうか。

島原市の景観ももう少し考えられないものだろうか。両市に比してかなり見劣りする所だ。

それにしてもリーダーを初めとして各委員の

方々の街づくりの協力熱意にはつくづく頭をうつされる思いであった。

佐藤英昭（資）南陽商会
この度 島原中心市街地 街づくり先進地視察研修として訪問地 滋賀県（彦根市と長浜市）に参加させて頂き、意義ある視察研修だったことを心から感謝申し上げます。

仕事柄視察研修と名打って幾度となく他で参加させて頂いておりましたが、いづれも物見遊山的要素が色濃く ただ行って来ましたと言うような旅行が多かったのですが、今回の研修旅行は商店街の存続に危機感をもった商店主や後継者の方々の、何とか今よりも またこれから先も 商店街をどのように活性化させ、そして島原を愛して今後よりよい方向に持って行くためにどうすれば良いのかという切迫した気持ちで全員目の輝きが違っていたのが特に印象的でありました。

まず私が感じたことは、彦根商工会議所においての会議所の足立様や登り町商店街振興組合長小椋様の熱意ほとばしるリーダーシップとアイデアや企画などの立案に積極果敢に取り組む姿勢に情熱を感じ、また長岡市黒壁～大通寺にあるお花館での現地説明では御坊表参道 通り商店街振興会の小倉様と商工会議所指導課長の吉井様の既存建築物の再生と活用およびTMO（中心市街地活性化基本計画）の取り組みの素晴らしい説明及び経過を述べられて、私自信その豊富な知識と納得できる施策に感激を致しました。

商店街と会議所と市とが一体となって取り組むにはどうしたら良いのか、会議所が商店街に対して良き方向に指導して、市に対してそれを提案具現化し協力する。当たり前の事を実行して商店街のために日

夜議論する。素晴らしいことです。

私たち湊道商店街は、ご存知のように20店舗のなりわいの中に後継者のいる店舗は、わずか4店舗位です。その商店街を今後どのようにすれば良いのかとその方法を模索しているうちに、今回のこの研修旅行の企画があり、本当に商店街のことを真剣に考える商店主が賛同し参加しました。

2日間寝台車に泊り、1日だけ旅館宿泊と強行軍ながらも疲労もいとわず自分の店のために商店街のために全員頑張って視察研修出来たことに、今回大きな成果が見られたのではないかと考えております。長浜/黒壁の街では長浜オルゴール堂の前のフルーツアイランド長浜店に入り、42種類の漢方やマムシと高麗人参などが入った生薬ドリンクをみんなで飲み、疲れを吹っ飛ばしましたが、ここはフランチイズのお店で健康野菜を使った手作り生ジュースの店です。以前は漢方薬のお店であったらしいが、店舗のスタイルを変えての方向転換に脱帽しました。なんとなくおもしろく興味ある店でしたが、ただ冬場がどうなのかと疑問です。また彦根市の夢京橋キャッスルロードは、江戸情緒漂う城下町風の建物が彦根城入り口に建ち並び、白壁、いぶし瓦、格子戸など統一された店が、いかにも江戸時代の城下町の再現で素晴らしいと思う一方で、真ん中の車道が幅広く車の往来が多くて、ぶらりゆっくりの雰囲気には程遠くちょっと残念でした。

あえて言えば伊勢市の伊勢神宮近くの『おかげ横丁』のような、道幅も狭くゆっくり見物できる所のほうが城下町らしくて私はこちらの雰囲気の方が好きです。

ただ新しい夢京橋キャッスルロードや花しょうぶ

通り商店街などの新しい取り組みの商店街に比べて市場商店街の方は、本当に昔ながらの店舗と店の主人の愛敬良さが郷愁を呼び、そんなアンバランスも良いのかなと思いました。つまり昔の井戸端会議のようにお客もくつろげるような光景が、商いの原点だと感じた次第です。

長浜は人口58,000人です。ここには都市銀行は一行も無いし、地銀のみであり。島原とて一緒です。しかして長浜は街全体が活気があり、イベントも秀吉博や青年歌舞伎そしてJRの直流化など官民一体となった行政の手腕がここに見られました。島原も出来ないことはない。カヤの外からワイワイ言うよりも、本当に生業で生きて行くのであれば、もっと積極的にアクションを起こしプラス思考で頑張っていかなければと思います。金をださずに口を出すこれでは商店街の未来の構築はない。これが今回私が感じた卒直な感想です。



彦根会議所
講義風景

街づくり先進地視察研修 考根 長谷の
旅に 参加して

漆道商店街

川井 勲

電車を降りて、考根の駅前に出る。あいに
くの雨模様です。商工会館まで、五分位との
ことで、歩く事にした。会館に着くと、約束
の時間にまだ間があったし、それらしい人影

はなかった。五分位、待つと、昇ね人が現れ、
会議が始まった。春気なもので、テーマが
何なのかわからず、今の進行を見守るにと
にした。ややして、だんだんと、中身が見え
始めて、街づくり先進地視察と言うことだ。

① 環境問題を、商店街の活性化に役立て
る。考根の登り町商店街の理事長(小枝)のお話
が始まり、高瀬の(足立)さんの現状報告と申し
おしよりの、今後の経験を報告され、商店街
と会議所連携事業にし、県・市に対する予

算の出どころの勉強。何如すれば、どのような
金を出してやらえるか、今の中身のちよつ
とした方向見方とでも。言：まじょうか、そ
れによって、資金調達が出来ると。出来な
い。決定すると言つて、まあ、掛引とも思え
る勉強の仕方など、実に良く努力して居られ
る様子が、手に取る様に、解る。お話を聞く
ことが出来、参考になることが多かった。

会が終り、街に、くし出て、商店街の視察
になった。考根の街の様子と、地域住民の

のあり住心地と、商店街の結びつき、この
様な基本的な街の姿と言ひゆは、何処
も変りようがないのですが、その中で、現
在、特に車を、中心として、行動する車社
会と、見捨てることは、出来ません。

考根の城を、核として、街づくりは、大
見とべき事が多いので、時代の流れは、
今の街の姿と、変へざるを得ないのでし
う。城前の商店街(夢京橋キヤフスにロード)
小江戸情緒漂う、新しき街なみ、江戸時代

城下の街並みも、再現した通りで、建物は
全て、切妻、彦根のまち屋風、白壁や、いぶ
し屋、格子戸がノスタルジックな、ふんいき
を漂わせています。みやげ物屋や、食事処
、甘味処などが、軒を連れ、お城散策した後
には、是非とも、おとづれた、ところに、な
ってまいります。その外に、(城下町 夢あふ
館)(彦根みくらさ処、俳諧館)と各々、テー
マ館が目立ちます。それと(花よりび通り)と
名をつけて、古き良き城下町風情と、城下町
の佇まいと、うみまゝ残す。伝統工芸と和
燭や、下駄、靴などの老舗が立ち並ぶ商店街
です。明治、大正期の洋館建築や、石炭、
銭湯など、今となつては、貴重な建物も残
っています。懐しの風景、笑顔で迎えてくれる
お店の御主人と、ゆったりと静かな時間が
流れているまじです。この理事長の長田修
二さんは、若い方で、彦根の商店街の中で、
一番小さい街ですが、中味は一番大きな街
にした、と思えます、と言われた言葉が、

胸の底に、ささります。
会食も終ったのが、十時過ぎで、相き方に
迷惑をかけると思い、そこで、打ち切りたいと
提言して終ったわけです。
夜の街も十方都市と言われるだけあって、
客の動きが、多に目に見えました。鳥原では
一人で、事業しているスペースの店に、五六
人の女の子が、カウンター内にいました。
次の日は、早朝より歩いて、約、一〇〇。
メートルに達、昔風の店が、並んでいゝ直線
です。
電車も走り、安楽の方に異動したわけ
が、面白、ことに、車中で、我々の前に、小
股の六十代位の女の子が、しゅしゅと、私
達の方を見て、鳥原まで聞、て居たのです。
「長崎から、おいで、ですが」の間に、「ハ
イ」と言つたら、「懐し、ですわ、名古屋に、
三十五年おりますが、私も北松の出です」と
言われ、世間の狭さにおどろいたわけ
です。安楽は、勿論、初めてお訪問です。以外に

駅の前が美しい。目の前が、すぐに商店街になつてゐます。しばらく歩くと、左の方角に昔風の家並を発見したら、そこが、我々の訪問しようとしたところでした。

お寺を中心にした、門前街、商店街と申しましようが、ゆらぐりと昔に、時間をもたしに様な、街造りをしていただきました。

大通りの女の様な、やさしい建物と、対称的な、黒壁も、メインに、取り入れた街並みは、時代劇に出てくる様な、街の構成が、実に

うまく演出されてゐます。時間もかけて、じっくり見込む気持ちにさせます。

観光も交通の便が良し、事が必要なんですね。駅前から五分位です。多くの老若男女が、散策されて居りました。

先づは、漢方喫茶とは、珍らしいもので、一ぱい、九八のふだのジュースを飲みほし、ええとつけて、街の散策にと、行動したわけ。黒壁の街の、一番奥まったところに、小物屋があり、そこに入ったら、老婦人が、

商売をしていられて、小皿と、藍染めのシヤツを賣つていられた、商売がうまいんですね。

その後、その商店街長と商観の課長さんとの話し合ひになつたわけですが、商観課長さんの見事な行動と話に、なまはらと、勉強しなければ、痛感させられました。

商売を続けて行く以上、死ぬまで、頑張つて行こうと思つたわけですね。

街づくりと、簡単な事はなほ、ですよ。お役所、そして、我々、(商店主)が、心を一つ

にして、頑張るしかない、と、結論づけた、旅でした。

企画された関係者、諸氏の御苦勞に感謝いたします。

よわい。

*彦根

彦根に着いてまず思ったことは、土曜日の朝とは言え人通りが少ないな、ということだった。それは商店街を歩いてても一緒に、やはり若い人は買い物に京都まで出るのだろうか、と思った。商店街は商工会議所で話を聞いた時にはすごく活気があり、色々な事に挑戦している商店街という印象を受けた。商店街もいくつかに分かれていて、かたまってなく長細く、島原に似た立地だった。

・銀座商店街

市内で一番大きな(長い)商店街だったが、建物が老朽化していて全体的に暗く、古くさいイメージだった。店の種類も少なく、同じ業種の店が多かった。現在リニューアルの工事をやっていたのでどれだけ生まれ変わるか楽しみである。

・登り町商店街

銀座商店街に隣接していた規模の小さい商店街。リサイクルの「エコステーション」やケナフを植えたり地元の客を集めようと色々しているのは、同じ商店街としてよく解る所。空き缶回収機はいいアイデアだと思う。が、それがちゃんと機能しているかどうかはわからなかった。と、言うのがこの機械の道路を挟んだ反対側にあったゴミ箱に空き缶が捨ててあった。たった5mという距離にあるのに「エコステーション」に持って行ってない。商品的には魅力ある商品もあったので、まだ地元住民に浸透してないのだろうか、と思った。実際にやってみて思ったのは、当たった後、その店がどこにあるのかが解らなかったのも、機械の所に簡単な地図でいいから置いていた方が親切だと思う。

・夢京極キャッスルロード

彦根城が目の前にあり立地条件は彦根の中で一番ではないだろうか?道も狭く、建物も古かった商店街を城下町風に建て直したと言う所はすごい。特に道幅の広さには驚かされた。店も条例を出した事もあり、きれいで整っていた。おもしろかったのが銀行まで協力して「両替商」の看板をしていたのがよかった。しかし、実際に歩いてみて思ったことは地元の人全然歩いていないということ。観光客にも喜ばれる街づくりをしたみたいだが、それがアダになり地元の人が行きづらい街になっていた。地元・観光客の両方をターゲットにしたため観光客を呼ぶための「スポット」に乏しく、今のままではリピーターは見込めないように思えた。商工会議所で話を聞いたときには羨ましく思った道路は、逆に広すぎて反対側の店が見にくく、渡りづらい。広いために車はスピードを出しすぎていて、渡ろうとしていた子供が危なかった。これからは地元民は望めないのであれば観光客をターゲットの街づくりが必要だと思う。

・花しょうぶ通り

他の商店街に比べ長さも短く、道幅も狭い所だった。が、何となく落ち着いた感じで、何とも言い難い風情があった。街の作りも昔風で、どの店にも木で作った看板があった。(作者が同一人物だったのでどれも同じ感じだった。何人もの人に作ってもらえたらもっと個性が出てよかったかも)観光客が浴衣で歩けるような暖かい街だった。しかし惜しむのが、キャッスルロードと離れすぎているために観光客が来られない所。近ければ観光コースになる事間違いないのに。

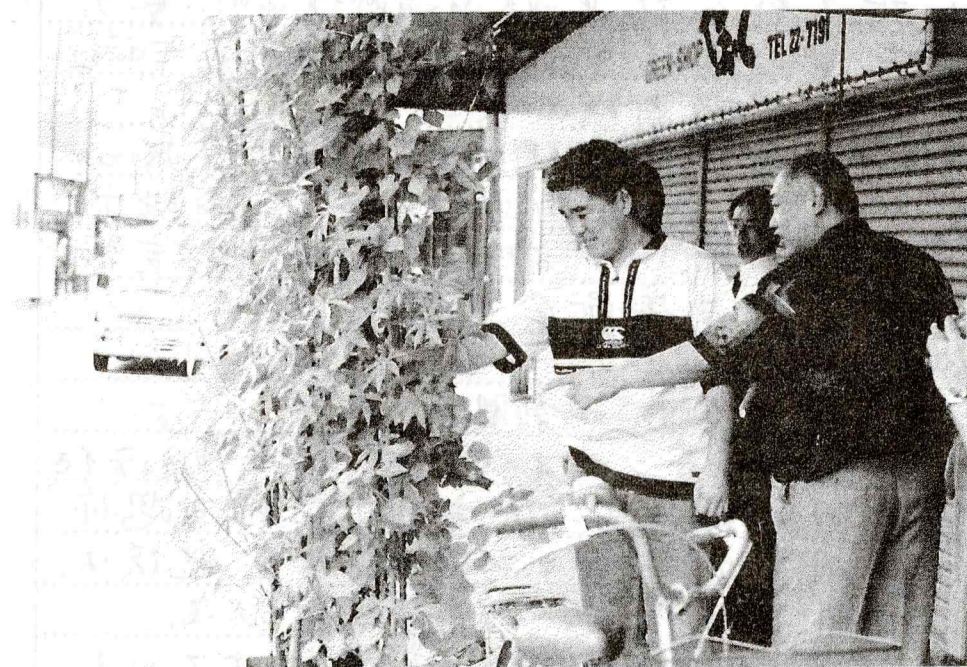
*長浜

そんなに大きな街じゃなかったが、見て回るにはちょうどいいぐらいの大きさだった。何も無いところからガラスを売りにしてガラス館など始めて、それが今では観光スポットになるぐらいに発展したのはすばらしい事だと思う。街並みも綺麗に整備されていて、見ていて楽しかった。彦根のキャッスルロードと違い建物に変化があるので見ていて飽きなかった。アーケードはそんなに綺麗ではなかったが、支柱が木の板で囲ってありかっこよかった。一番街の支柱も色を変えるのではなく、こんな作りにすればよかったのにと、感じた。アーケードの中を流れている米川はちゃんと掃除されていてゴミ一つ落ちてなく、鮎が泳いでいるすごく澄んで綺麗な川だった。島原も「水の都」を表に出しているのだから、こういう所を整備する必要がある。

島原の一番街と同じ問題として、アーケードであるために雨の日は濡れずに買い物できる利点があるが、晴れている時でもアーケードの中が少し薄暗い所だった。長浜で一番印象に残ったのが「ながはま御坊表参道」だった。建物もきれいに整備されていて、軒を少し前に張り出すことによって、雨の日には雨宿りの場所になる作りだった。道幅も両脇の店を眺めながら歩ける広さだった。観光客のことを考えるとこのくらいの広さがちょうどいい。

長浜は観光客の事をよく考えた街作りをしてるな。という印象を受けた。

最後に、個人的に羨ましかったのは「長浜出世祭り」の「きもの大園遊会」でした。長浜は「長浜ちりめん」の産地として、元々着物に縁のある地ということもあり、毎年2000人の女性が着物を着て集まるというのはこの地ならではの祭りだった。近年着物は「成人式しか着る機会がない」という理由で着物を着ない女性が増えているので、こういう祭りがあると「着物を着たい」と思う女性が増えそうなので、こんなイベントが島原でもあればと思いました。



街づくり先進地視察石井町について

平成 11. 9. 3 日

大規模小規模併行法に施行され、25年の永きに亘り
実施され、大型併行、ローカル大・中量販店に依る進出
を見、全国の都市部併行、再併行は影響を受け、
空店併行対策と経済の不況等々で果市行政と
財政難に陥りざたされ、様によりました。

98年7月11日申10市街地汚浄化法

98年11月には改正都市計画法が施行されており、
此の二法に大沽立地法を加え「街づくり三法」
が2000年5月には施行実施されるという。

此の時機に東京銀座街の市景と行政とが
立てあつたことは、本市に時談之石研究報
行であつたと思ひます。研究こそが完成
次第、市工會議所経済委員会市景と共に
勉強会を組織したといふのであります。

街づくり三法の原則

地域住民にとって、暮らしやすい、地域のコミュニティ
形成するための一連の公的、私的活動を總称
する概念と説明してゐるすべ、大省立地域は、
大型市は周辺の生活環境の保持を通じて、
街づくりの一端を担うものと位置付けている
ように思ふ。大規模小売店舗を設置する為、
面して、すべき事項は、

1. 駐車需要の充足及び交通にかゝる事項
2. 歩行者の通行の利便の確保
3. 廃棄物減量化およびリサイクルについて
の協力
4. 防災対策への協力
5. 騒音問題の対策

以上大活立地法には、地方に対して制度徹底させ、
四増を図られることです。今後大型活立地を
するとは、大変になります。より困難になる様で
す。

今般島聖各地區商店街は此の4ヤンスを収う。

此城における創設工夫を生かし、市街地商店街の整備改善を計るべきものと認めます。

住民に受け入れられる島嶼半島の中核都市である。

彦根市新市街乙通丁。

1. 東京橋キヤッスワールド

(イ) 江戸時代に作られた、当時の風情を残し、

市、新築風土と並ぶ新15街として、城下町として、

マッチしてゐた。

(四) 道路の幅として広い様にするに、今後の10ヶ都市としては必要だと感じます。

(ハ) 花しょうぶ通り、その他の歩道街を、今後整備・歩道
拡充改道中でしたため、今後の集客にどのような影響を
与えるかを要検討す。

(二) 商店街 客先通・プロットボトル回収車の併走

地城の環境にやさしい街づくりとして感じられ
るが、処理、運搬等継続に難点がある。

2. 長浜商 15 軒

1. 墨壁前16軒 → 大通寺は馬堂前16軒に適合
す。一番女「まふなめではな」かと思ひます。

ロ 小倉隆彦様方申付の「習力」の書物に感服致したため、特に御方大型16 ジヤスコの進出を阻止されたとのこと、吉井課長様へ / 約1/2 分の

街づくりとまちづくりの手法に対する習得：勉強

対人はなれにそでをなす、奉仕精神と責任感の旺盛な子ではないかと思ひます。

現在、各地よりの相談されたい方の指導説明
散服致しました。重ねて、皆様所定街指導

今後島根県庁街は、行政、商業、金融の
 樞軸を量け、立ったあべつて、街づくりにより、再
 生されることを切望致します。

§ 序章 古都京都とコーヒー

イノダコーヒーのコーヒーを本店で飲みたい。

ファンの方も多いと思う。「境町通り三条下る」にあるイノダ本店は、昔ながら純和風のたたずまい。のれんを分け入ると、昭和15年創業当時の雰囲気にとっぷりと浸かれる。

コーヒーを頼むと、ミルクと砂糖が最初から入っているコーヒーが出てきて、有無を言わさず飲まされたものだ。そこに、文化のようなもの、歴史のようなものを感じた。

チャンスがあれば行こう、と思ったりしたが、今回の真面目な研修では、許されないだろうと言い聞かせた。

§ 1 彦根のまちづくりの基本軸

JR彦根駅からの人の動線として

- 1 彦根駅前商店街→京町通り商店街等→彦根城へ
- 2 彦根駅前商店街→番町ルネッサンス商店街（仮称）→キャナルロード→彦根城へ

南彦根方面からの人の動線として

- 1 橋本商店街→花しょうぶ商店街・銀座商店街→市場商店街→キャナルロード→彦根城へ
- 2 彦根城→キャナルロード→銀座商店街・登り町商店街等へなどが構想の中に整理されている。中心市街地150haをより効果的に活性化するためによく考えられている。

仮称番町ルネッサンス商店街、市場商店街の問題等がどうなるかも含めて、これからアンテナを向けておく必要がある。彦根城を有する先進地彦根のまちづくりは、島原のまちづくりの参考となるところ大なりと思う。

§ 2 彦根登り町商店街は環境だけでなく島原の人にもやさしかった

彦根商工会議所の安達昇経営指導員の流ちょうな説明で、当研修は、幕を開けた。彦根弁のためか、最初は完全には理解できなかった。経営指導員としての通常業務に加え、TMO構想の作業をされた努力と忍耐はすごいと思った。これから中心市街地活性化構想の策定に入る長崎県内の市町村の良き指導者に出会えた。

次に、彦根登り町商店街小椋征昭理事長は、島原から夜行列車で視察に来たことを驚き、われわれに少しでも勉強してもらおうと、一生懸命に説明をしてくださった。その内容より、休日返上してまで、多忙な中、話をしていただき、われわれの各人ばらばらの質問にも、丁寧に回答をする姿勢を見て、感動した。

ラッキーチケット付き空き缶回収機のノウハウを説明いただいた中村副理事長にも感謝したい。また、話の中で、小椋理事長が、現在使用中の空き缶回収機を島原に貸してもいいと言われたのにもびっくりした。ありがたいことだ。

§ 3 彦根登り町商店街のケナフとアクト

環境にやさしい街づくりを目指す当商店街は、二酸化炭素を多く吸収する植物ケナフを栽培している。聞けば、アフリカ産のものらしい。琵琶湖で外来種の魚、ブルーギルやブラックバスなどが異常発生し、日本古来の小魚が絶滅の危機にある。環境問題に取り組みながら、生態系を壊しかねないことをするのは疑問だ。

空き店舗を地元滋賀大学の学生に提供し、街づくりに新たな風を呼び込もうとしている。すばらしい。島原でも何か、たとえば、島原商業の学生と交流ができる場が持てればいいなと思った。

§ 4 彦根花しょうぶ通り商店街の銭湯

花しょうぶ商店街にある旅館に泊まったが、「風呂は、商店街にある銭湯をどうぞ」と言われた。旅館の風呂は少し狭いようだが、宿泊客に、商店街を含め自分たちの住むまちを見てほしいとでも言うように、「おもしろいお店もありますよ」と付け加えた。銭湯に浸かりながら地元の人の会話を聞いたり、商店街を見て回ったりして、彦根に来ている実感をかみしめた。

島原では、ホテルや旅館が、宿泊客を閉じこめ、ホテル内の店で土産を買わせ、飲み食いさせることばかりに気を使い、旅行者に本当の“島原のよき風土”を知らさないままに帰しているのではないか。疑問が残る。

§ 5 長浜黒壁スクエア

観光地に来た感じ。黒壁ガラス館1号館は明治時代の建築物と商品であるガラス細工のマッチングは、イメージ的にも

島原商工会議所中小企業相談所

所長 吉田耕二

去る9月3日から6日の4日間、島原市中心市街地街づくり推進協議会のメンバー21名の一員として、街づくりのモデルとして全国的に知られている滋賀県彦根市と長浜市の視察研修に参加した。

久しぶりに夜行列車にゆられて、車内は寝るのも忘れての夜なべ談義、特に森岳商店街若手諸君の自己商店街及び島原市のまちづくりに対する意見などについては、日頃から聴いている以上に活気があり、熱心であり、さすがに他の商店街には無い将来についてのコンセプトがきちんと整理され行動されているなど感心した。

さて、視察して感じたことであるが、彦根、長浜両市には、昔から歴史と文化が存在し、それを時代の進展と共に街づくりの中に反映させ生かしている。そこにある素材を十分に生かすと共に、人が求めている現代の要素を取り込み観光と商工業が共存し繁栄している。

彦根の花菖蒲通り商店街と本町夢京橋キャッスルロードや長浜の黒壁や御坊表参道商店街は、既存建築物を最大限に再生、活用しているし、又、街並みの形成により日頃からシルバー世代、ヤング世代を問わず多くの来街者（観光客）で賑わいを見せている。

しかし、これを現在の島原市に求め、建設しようとしても現状では財政的な面を含め、非常にむずかしいと思われる。

従って島原は現存する素材を生かしながら、島原らしさと新しさを打ち出して取り組んで行く必要がある。幸い、島原には他に無い埋もれた素材が市内に散在しているといわれており、これを掘り起こして付加価値をつけながら街づくりに結びつけたらどうか。

彦根、長浜においては、あまりにも観光客重視型であり、地元市民に愛され地元の人が日常生活の中での消費行動が伴わないと、本当に地元に着した商店街にはならないだろうと思う。

両市の商店街関係者や商工会議所指導員の説明においても、商店街の活性化については、やはり行政、あるいは商工会議所の協力や相談指導が不可欠であるが、それ以上に商店街における強力なリーダーの下、ヤル気と熱意を持ち一丸となつての取り組みが、行政を商工会議所を一般市民を動かす。これが地域住民に支持される商店街の生き残りのキーポイントであると感じている。

当市においても、これからTMO機関の検討や中心市街地の街づくりに取り掛かる予定だが、計画の策定よりも先に人づくりが大切であり、既存の島原市中心市街地街づくり推進協議会の組織を生かしながら、まづ、組織づくりを中心に検討したいと考えている。

幸い当市の商店街においては最近、序々にではあるが若い世代にヤル気が出始めて来た。策定した計画が「絵に描いた餅」に終わらぬよう商工会議所としても県、市、商店街、あるいは地域住民等関係者との連携で積極的に取り組んで行きたい。

これからの島原市商店街の積極的なアクションに期待したい。

絶妙。どこにでも、「黒壁スクエア散策マップ」などの観光マップが置いてあり、みんなマップを片手に回っている。

また、要所には、手描きの大きなマップ（2m×1m）があり、「ここは、どこだ」状態の観光客にはありがたい。

黒壁スクエアは、島原の商店街が参考にすべきところがたくさんある。商店街のあり方。個店のあり方。建物の保存・改築の方法。施設、トイレ、催事等の情報提供のやり方。

島原の商店街のすべての店には、そこから来た人のための無料のマップやパンフは置かれてないし、トイレの表示も行き届いたかたちでは、なされていない。

§ 6 ながはま御坊表参道「お花館」

黒壁スクエアから、新しいアーケード大手門通り商店街へ人が流れる。さびれた祝町通り商店街へ人は流れない。

ながはま御坊表参道に入ると、人が結構いた。特に、お年寄りの団体が目につく。その「お花館」で小倉表参道商店街振興組合理事長から、4年前までかかっていたアーケードをはずす時の苦労話等をお聞きした。

また、長浜商工会議所の吉井茂人課長から黒壁を含めた長浜市の商店街の活性化策について丁寧な説明をしていただいた。国内の成功事例地には、吉井課長や、小倉理事長のような人が必ずいる。その先見性はすばらしい。

電柱を商店の敷地の中に引っ込めたり、大通寺のライトアップ費用を商店街が出したり、商店街改装にあわせて、紳士服屋からうどん屋に店の業種を変えたり…なにかそこには、商店街の人々や住民の力強い意思があるように思う。自分たちはこのような街に住みたい。このような街を子孫に引き継がせたい。というような意思を感じた。

§ 最後に

すばらしい研修だった。いよいよ島原でも、歴史と文化の蓄積が始まるぞ。最終日、イノダ本店へは行く時間もなく、しかたなく、JR京都駅前地下街ポルタにあるイノダコーヒーでコーヒーを飲んだが、文化の香りはなかった。島原にも、うまいコーヒーがあると聞いたが、水がうまいということは、本当にすばらしいことだ。長浜にも地ビールがあったが、島原の地ビールが当然にうまかった。

森岳商店街

村田 真樹子

今回の研修に参加して感じた事の結論からいきなり書くと、
「彦根も、長浜もつくられすぎているな」という事を感じました。
彦根のイチ押しメインストリートの「夢京橋 キャッスルロード」や長浜の
「北国街道」などは、人の手が入りすぎて観光地としては良いの
だろうが、住むには不自然なまちと化しているように思います。
たしかに、居住するだけでなく、観光地として割り切って想像すると、
集客もよく、リポーターも増えるのでしょうか、私が理想とするような
雰囲気ではありませんでした。くちわとした道端の演出などは、
ちのすごく勉強になりました。

それでは、私の理想するまちはどういうものかと言うと、まだわか
り形になっていませんが、手前ミソですが森岳商店街に近いまち
だと感じています。広くない道路や近所からケチャップや、コーヒ
ーフィルターを貸し借りできたり、子ども達が元気にハネまわっている
まち。今でも充分近いものがあると思いますがそこに幾つか「何か」が
欲しいのです。まちづくり運動三年目の私には、その「何か」が
何であるのか、解ってあらず非常にもどかしく思っています。
今まで参加した視察や研修も専門的に見る事ができず、
「何か」を探していたように思います。当然今回もです。よって冒頭の
ような結論がでてしまいました。

あとひとつ、今回の研修で感じた事なのですが、他商店街の方々と
泊りででかけるのほとてもおもしろかったです。いつもと違う顔、いつもと
違う発想が今まで考えた事なかったような事柄を描きだして
きます。なんだかとてもスリリングな感じがしてとても良かったです。
今後まだまだ理想のまちを固めるためにも、あちこちと見てまわ
りたいです。本当に映画とお風呂は島原に欲しいものですね。

おわり

彦根・長浜・・・「1泊4日」の視察記

島原市役所商工観光課 松下英爾

そもそも同級生でもある、わかば写真館の松坂昌應君の紹介で、多種多才（多彩？）
な皆様方と滋賀県彦根市と長浜市への「1泊4日」の「旅」ならぬ視察を体験させてい
ただきました。

以下に、視察対象の事実関係と少しの感想を記させていただきます。

■言わば〈観光通り〉の夢京橋キャッスルロード

夢京橋キャッスルロードは、昭和60年の都市計画道路建設計画が発端となって、彦
根城の真下に位置するという好条件を生かし、全長350mの街路を「江戸時代に建て
られた往時の風情をそのまま残し、落ち着いた静かなたたずまいの屋敷や商家が立ち並
ぶ町」として再現したものであったが、キャッスルロードの道幅は18メートルもあり、
車の往来も結構あってにぎやかであった。

街路には、「OLD・NEW TOWN」というキャッチフレーズで、飲食店はもと
より、写真店、クリーニング店やペットショップ、ガソリンスタンドなど、約50軒の
お店が江戸町づくりで一直線に立ち並んでいて、大変きれいという印象であったが、事
実上の〈観光通り〉であった。

■TMOは先行していた・・・

TMO (Town・Management・Organizationの略) の進捗
状況についてであるが、彦根市は、長浜市と同様、事実上TMO構想が先導し、それを
追認する形で市の中心市街地活性化基本計画が策定されており (TMO構想及び基本計
画〔概要版〕については、もらって帰って来た。)、今年1月に通産大臣によるTMO
計画認定を受け、3月には同計画に基づく事業 (花しょうぶ通り商店街事業) が完了し
ていた。

■酒の勢い?・・・反省しきり

その夜は、彦根市の花しょうぶ通り商店街の通りにある古風な〈とばや旅館〉に宿泊し、夕食時に、その日の午前の研修で話をお聞きした登り町グリーン通り商店街理事長さんたちから彦根市散策の感想を聞かれ、酒の勢いもあってその場で「率直な」感想を並べ立てたが、地元商店街に対して全体としてやや手厳しい意見に過ぎた感があり、その後何人かで行った（大変懐かしくもあり、味わいもあった）すぐ近くの銭湯で、反省しあうことしきりであった。

なお、花しょうぶ通り商店街にあつた〈花しょうぶ館（寺子屋・『力石』）〉は、江戸後期から現存する貴重な町家を文化交流の場として保存、活用したものであり、平成12年度に島原の森岳商店街が企画している「理髪館」活用構想と重なって見えた。

■空き缶回収は子供たちが喜んで・・・

登り町グリーン通り商店街が実施している〈空き缶回収機設置事業〉については、空き缶や空きペットボトルを街中に置かれた機械（機械は5年リースで4万円という）に入れると、何回から何十回前後に1回位の確率で当該商店街商店の商品や旅行が当たるという事業であり、平成10年末に2か月間、平成11年は5月から12月まで実施中であった。

空き缶等は子供たちが喜んで持って来て機械に放り込んでいるが、回収した空き缶は商店街が福祉協議会に譲っており、協議会は、アルミ缶をアルミ会社に持って行って現金化し、運営資金の一部とされているとの話であった。

この空き缶回収制度については、森岳商店街として実施を検討する意向とのことであるが、本市においては、現在島原市内の子供会等で実施されている空き瓶等回収報奨金制度があり、その制度とのかねあいなどを考慮する必要があると思われる。

なお、同商店街の各店の前のフラワーポットには、CO₂の吸収率が良く、紙製品の素材にも利用可能で、地球温暖化防止と森林保護の観点から注目を浴びている「ケナフ」という植物が植えてあり、商店街ピーアールのアクセントにもなっていた。

■長浜・黒壁は、とにかく観光客であふれていた。

次の日の午前、〈ながはま御坊表参道通り商店街振興組合〉の小倉理事長さんと長浜商工会議所の吉井さんから、まちづくり、商店街づくりの実体験に基づいた、とても、とても熱い話をお聞きした。

長浜では、長浜市郊外に3万㎡の大型ショッピングセンターの建設計画が浮上したことを契機に、平成3年に地元商工会、商工会議所が一体となって中心市街地活性化プランを作り、様々な実践に実践を重ねた上に、「今」の長浜の賑わいが成り立っていた。

長浜には、全体を博物館と見立てての「長浜博物館構想」が根底にあって、①観光商業で入り込み客を増やす ②景観形成に努める に力を入れ、現在、「黒壁スクエア」へのリピーターは40%あるとのことである。

前日に訪問した彦根はこれまでのまちづくりを都市計画サイドで進めてきたが、長浜は都市計画サイドではなく商業振興サイドで進めてきており、「自分たちのお金でやっていく。夢と子供、将来を考えて投資する。過大な投資はしないで、できることを次から次にローコストでやっていく」ことを基本コンセプトとしているとの話であった。

また、商工団体としては、市や議会に要望書を出すことによって双方の議論の場を現実につけてきており、TMO構想は商店街が作り、追っ付け市の基本計画が出来たが、基本計画づくりのための議論は十分ではなかったとも言われていた。

ともあれ、長浜については、地元商工会議所の、今後さらなるTMOの実践や市街地活性化、商店街振興に関する並々ならぬ熱意と商店街に対する強い指導力が強く感じられた。

☞ということで、あつという間の4日間でしたが、寝台列車でいろいろ議論しつつ帰って来た朝、自宅で朝風呂と着替えをすまして市役所に戻ったあと、やっぱりボーッとした頭での、その日から始まった9月議会の答弁書書きの大変な苦労も、今では、視察と繋がったほろ苦い思い出となりました。

街づくり先進地視察研修 報告書

(資) いろはや商会 中山実津雄

平成 11 年 9 月 3 日から 9 月 6 日早朝まで、「街づくり先進地研修」に参加させていただきました。この機会を恵んでいただいた、わかば写真館の松坂様はじめ商工会議所、振興局地域政策課の方々にこの場をお借りしてまずは感謝の意を表したいと存じます。

1) 彦根～

彦根市は井伊直政公で有名な「彦根城」があり、その城下に 8 つの商店街がある。立地的には同じ城下町の島原と類似しているところがあり、参考になる点も多かった。

その商店街のうち、商店街理事長のお話を拝聴できた「登り町商店街」と昨今注目を集めている「夢京橋キャッスルロード」の 2 つに重点をおいて報告していきたい。

①登り町商店街～

この商店街では、大きく 2 つの事業に取り組まれていた。一つは環境に対する取り組みで、もう一つは学生と協調した事業の取り組みだ。

1、環境に対する取り組みについて～

ここでは、空缶を入れると商店街の商品券、旅行などのプレミアムが当たる空缶用の「自動販売機」(?) が設置されていた。(500 メートルに約 2 台間隔)
また、環境にいいとされる「ケナフ」という植物を無料配布、商店街でも栽培するという試みだ。

2、学生との「街づくり」の取り組みについて～

滋賀県立大学の方に商店街の空きビルの 1 階を無料開放、そこで学生の方に集ってもらい街づくりに参画できるような取組みだ。学生ならではの企画などでお祭りなどのイベントでは一役かっているようだった。

登り町商店街を歩いてみて～

登り町商店街は、シャッターが降りているお店も多く、残念ながら閑散としていた。

確かに理事長はじめ一部の方はいろんな事業に熱心に取り組まれているが果たしてそれが

「町をあげての」事業かどうかは疑問が残った。「環境」というテーマも一朝一夕では定着しない、永続性が求められるテーマだけにわかりずらかったように思われる。

②夢京橋キャッスルロード～

彦根城を正面に見て約 350m、“old new town (古いよさを生かした新しい活みなぎる町)” をコンセプトにすべての建物において城下町を再現した通りだ。ここではすべての建物、銀行はおろかガソリンスタンドまで瓦屋根で建設されている。

町は観光客おぼしき人で賑わい、活気溢れている。

また、幾つかの店舗では、建物だけでなくご商売の内容まで城下町に合わせた品揃えをされていた。

夢京橋キャッスルロードを歩いてみて～

この通りは登り町商店街の環境事業と比較して非常に切り口がわかりやすい。

その切り口は他ならぬ「城下町」である。

しかし、その城下町はおおよそ生活観というもの排除されていて、まるでどこかのテーマパークを歩いているようだった。

彦根市 講評～登り町商店街と夢京橋キャッスルロードとの比較

今日、手っ取り早く街を賑わせるには夢京橋のようにコンセプト (=城下町)、ターゲット (=観光客) を明確にしてハードとソフトをそれに沿って作り直したほうが良いように思う。(ご近所の同意が取れればの話だが)

しかしそれは、「夢京橋～」のような街を島原でも再現すればいいのかというと、決してそうではない。

ターゲット、コンセプトは時代とともに移り変わり、非常に流動的だ。イベントなどの一過性の物であればターゲット・コンセプトを明確にするのも一案だと思うが、街づくりという終わりのないテーマには不向きのように思われる。

モール屋根がなかったらお客が来ない、和風で統一しないとお客がこないなどと、場当たり的にその時代その時代に合わせるべきではないように思う。

なおかつ、その時代時代のコンセプトに合わせて、建物を毎回建直していたら建設費だけで商店街、ならびに商店の方々の家計を逼迫させてしまうであろう。それでは本末転倒だ。

では、どうしたらバランスのとれた街づくりができるのか。

私は、商店街という自然発生的にできた街の文化・歴史の存在意義を再認識した上での取組みが必要であるように思う。

この地域がなぜ過去に栄えた理由があるのか。この街はこの市場でどういう意味があるのか。先祖は過去にここでどういう商売を営んでいたのか。再度、認識しなおす必要があるのではなかろうか。

文化や歴史をないがしろにした街など、何の魅力も感じえないだろう。

文化・歴史（＝ソフト）が主導した建物（＝ハード）づくりが今一番望まれている事ではないだろうか。

2) 長浜～

2 日目は黒壁で有名な長浜商店街だ。ここにはたくさんの商店街は連立し、木造のやさしさで建物が統一された個性豊かな街を演出している。

長浜については表参道商店街を中心に報告していきたい。

表参道商店街は正面に大通寺の門前町として発展してきた地域で、約 100m 両脇に 31 件のお店が並んでいる。駐車場は約 100 台の無料駐車場と、30 台のコイン式駐車場がある。その通りには電信柱が存在せず、各店舗の軒指が情緒溢れる門前町を演出している。お店・建物の細部にも工夫されていて、大きな番傘のしたで休憩する人達や、キツネをもじった橋の手すりなど、散策していても非常に趣がある。

（この地にはお花さんというキツネが棲んでいて、それにまつわる伝説がたくさんある。）

こちらの商店街も数年前までは、大型量販店の出店に脅威を感じながら過ごされていたようである。しかし現在では、大型量販店との客層とは異なる客層の集客に成功されていた。その成功について、商店街理事長・コンサルの方のお話も交えながら述べていきたい。

I 基本構想の重要性

まず、街づくりに必要な物は「基本構想」を掲げることだ。その基本構想とは、一画の街や商店街のみでなく、市全体としてのマスタープランの事だ。それには時代時代で変更するのではなく、ある程度の普遍性が求められるように思う。そして基本構想は誰が見ても一目瞭然なシンプルな物でなければならない。

ちなみに長浜の基本構想は「都市博物館構想」だそうだ。

これにもただ単に、「災害からの復興を！」や「市街地の活性化を！」など呼びかけるだけではない。

「基本構想」を構築するには、4 人の専門家が重要だという。

その 4 人の専門家とは以下の分野の専門家だ。

- ①マーケティングの専門家・・・街づくりを考える上で、どのターゲットを想定していくのか、そのセグメントの定義はなにかを見極める。
- ②地区計画立案の専門家・・・行政にも顔の利く、地区立案の経験がある人間。
- ③都市デザインの専門家・・・都市をハード、ソフト面の両面からトータルコーディネートするための専門家。
- ④建築の専門家・・・建物（ハード）中心に立案する、建築基準法などの法律にも明るい専門家。

まずは、上述した 4 人の専門家を選出し「基本構想」を掲げなければならない。

ここで重要な点は行政側の人間が必要な事である。なぜなら、日本の法律の場合、欧米のそれと異なりタウンマネージャーには事業遂行の権限がなく、行政側が権限を握っているからである。

II 事業計画の立案・遂行。(TMO 構想)

4 人の専門家と基本構想が決定したら、次はその基本構想を具現化するための事業計画の立案である。その際にも一つのイベントにどれだけ投資し、どれだけの収益があるのかという損益計算書と今保有する物をどれだけ活用したかの貸借対照表をしっかりと出すべきである。

言うまでもなく、投資の魅力がある事業計画にしなければいけない。

ただ、お金を使いチラシを撒き、人を集めて飲ませ食べさせ、ではなく、しっかりとした「事業」として行うべきである。その時にもチラシ配布による効果、イベントにおける来店客の相対年齢層などの情報をしっかりと認識し、それらを翌年のイベントに利用する。

長浜でも「きもの展」、「文化人公演」「夜市」などたくさんのイベントを立案、遂行されていた。どれも立案は商店側、資金支援、交通整備規制などの支援は行政側など、役割がはっきりしていて店舗側のもつ集客と公共が持つ集客がリンクした好例だ。

また、長浜では民間投資が行政投資を上回る、簡単に述べれば、行政の資金支援よりも民間からのイベント寄付金のほうがお金が集まる程、投資効果が期待できる事業計画となっているそうだ。

そこでの理事長のお話でも、すべてのイベントの説明の前に枕詞のように「今年は…」と言われていた。裏を返せば毎年趣向に変化を加えているのだろう。

これだけの変化の時代に「例年どおり」で許されないのは当然といえば当然だが。

III 郊外型大型量販店の対応について

昨今の傾向として、大型駐車場を兼備した大型店の地方出店が相次いでいる。

その背景には、車社会や深夜営業などの消費者のライフスタイルの変化があるが、長浜の各関係者は痛烈に批判されていた。

その批判の内容は環境の点からの批判が主だったものだった。

今日のエコ時代にあれだけの土地の植林を伐採し、土地をならし、なんたる資源の無駄遣いかということである。おりしも企業の「環境会計」が重視されている時代に、ただ消費者の利便性ばかりを重視してはいつかはこの星が減びるのではないかと、本当に危機されている様子だった。

事業主が、単に「環境に悪いから出店をしないでください！」というのでは環境問題にかこつけて自分の商売のお客をとられるのを防ごうとしているとしか思えない。

それではなく、「商業者自ら環境問題に取り組んでいますよ」というメッセージが必要だ。

長浜の商店街のすごい所は言葉だけではなく、本当に環境問題に取り組まれている点だ。

「ゴミゼロ運動」や彦根の登り街商店街で前述した「空缶回収機」の設置など数々の事業にとりくまれている。

ある意味消費者至高の時代ではある。しかし、我々を取り巻く環境が蔑ろにされているのはどうか、という事である。

消費者が環境に対して考えられる世の中にしていくのも企業・街の役割ではないだろうか。

表参道商店街を歩いてみて～

商店街理事長や各関係者の話は、非常に斬新だった。そして、言われたとおりの事が街中で実施されているのにも二重の驚きを覚えた。

そして「街づくり」という、どこかセンチメンタルな感じがする事業を採算ベースの事業と捉え実行、結果を残されているのには痛く感銘を受けた。

今後も、節目節目で議論の場を設け近未来の消費者のライフスタイルを予測しそれに伴い事業計画を練っていく姿勢はまるで企業精神を見るかのようなようだった。

終わりに～

最終的には、事業主や市民の「夢」をいかに共有できるかがカギとなってくるのではないだろうか。それには市民としての役割、事業主としての役割、行政としての役割を各個人が果たし、気運を盛り上げてく。その盛り上がりなしでは街づくりは片手落ちになっていく恐れがある。

都市計画法も TMO 事業も、全ての地域振興の法律はバラバラのものである。それを体系的、立体的に捉え、共有した「夢」をベースに計画を練っていくのが今後の課題であるように思われる。

一部の量販店や郊外店にみられるような行動科学に基づいた店舗設計ではなく、商店街のような雑多なつくりで寛ぎや楽しさを感じてしまうのは果たして私だけであろうか？

この地に商店街があるべくしてあった歴史的背景、それが繁栄してこれた理由を再度、確認し、後継者などにそれを「情報（＝ソフト）」として事業と一緒に引継ぐべきではなかろうか。

我々の先祖は幾度の困難を克服し、この地でご商売をされてきた。本当に消費者が必要としないのであれば残念ながら商店街は衰退しても仕方があるまい。

それは商店街店主の怠慢が衰退という結果を招いたにすぎない。

巷では TMO や街づくり三法などと騒いでいるが、行政がいくら指導した所で一人一人の店主にその自覚が無い限り、街の発展はないだろう。

商店街や街づくりをやれ改装オープンや、やれポケットパークやとハード主導で考えていても決してお客様は戻ってこないであろうし、街も賑わいを取り戻せないであろう。

本当に自分達にできることは量販店の通一遍のサービスではなく、真心のこもったサービスを実施することではないだろうか。

ハードをいくらいじったところで街は決して賑わいを取り戻せない。それぞれの店舗が一人一人のお客様を大切にし、まずはお店が潤う。各店舗が継続して努力し、結果街が潤うように持っていかなければならないように思う。

市街地とは昔から、学ぶ事ができる、遊ぶ事ができる、働く事ができる場所であった。

この根本は今も変わらない。今の時代に合せて、学ぶ事ができ、遊ぶ事ができ、働く事ができる街ができれば自然と街は賑わいを取戻す事だろう。



1. 視察研修を振り返って

彦根と長浜。同じように琵琶湖の湖岸に広がる、群雄割拠した戦国時代における、有力大名の拠点、東西交通の要衝としての役割を、その歴史のルーツとする共通点を有しながら、現代におけるまちづくりの視点、考え方は微妙に異なっているように思われる。

琵琶湖との関わり方を見ても、彦根は琵琶湖を「背」にしているように感じられるが、長浜は「正面」に見据えているような印象を受けるのである。どちらかと言えば、石田三成や井伊直政のイメージのように、彦根は「官僚的」「文人的」であり、豊臣秀吉のイメージそのままに、長浜は「開放的」「庶民的」であることが、影響しているのかもしれない。

中心市街地の形成、広がり方を見ても、彦根は「彦根城」を核とした、いかにも城下町然とした佇まいであり、商議所や商店街組合の関係者の意識も、どちらかと言えば「

官」主導のまちづくりをイメージしている印象が強い。一方、長浜は琵琶湖に向かって広がっている感があり、大通寺や長浜八幡宮を中心とした庶民信仰と、秀吉による楽市楽座に始まる「商いのまち」としての歴史に根ざした、「民」のパワーによるまちづくりを実践している印象を強く持った。歴史的、地理的に似たような状況下にあるながら、まちの「顔」はおのずと違ったものになることを、図らずも教えているようである。

片やキャッスルロード、片や黒壁とガラス工芸に代表される、観光とまちづくりの成功例として紹介されている彦根と長浜ではあるが、そのプロセスとこれから目指そうとしている方向は、明らかに異なっているようであり、今後の両市の「成り行き」は、むしろこれまでよりも、「これから」をウオッチすることが、島原に限らず各地のまちづくり、観光、商店街の活性化等を考える上で、幾多の示唆を与えるような気がしている。時流に乗った者は、いずれ時流に取り残されるのが世の常なのだから。

2. 彦根におけるまちづくりについて

キャッスルロードに対する評価に、賛否両論があるのは当然と言えば当然であろう。

(今回の視察研修参加者には、一様に不評のようであるが。)しかし、あの街並みの整備を実行し、やり遂げたこと自体は大いなる賞賛に値する。事業の端緒から完了に至る間に、幾多の意見、利害の衝突があったことは想像に難くない。そこをどうやって調整し、なおかつ事業資金を調達したのか、学ぶべき点はそこにあると考える。結果的に出来上がった「姿」だけを見て、あれこれ批評しても建設的とは言えない。

いわば、手本としてのキャッスルロードがあるからこそ、市内の他の商店街においても様々な取組が触発されたのではないだろうか。同じような考え方、手法による事業を指向する者(団体)も、登り町や花しょうぶ通りのように違う方向を目指す者(団体)も、より具体的、創造的活動を活発化させる契機になっていると思うのである。

今回の視察研修においては、市をはじめとする行政関係者との接触はなかったが、いわゆる「景観条例」の制定など、行政による主導も彦根におけるまちづくりの特徴と言えるのではないだろうか。

また、県立大学の学生グループと商店街との交流も特筆すべき動きであるが、まだ、緒についたばかりであり、今後の展開に注目したいと考える。学生グループの活動の実態は必ずしも明らかではないが、今後のまちづくりを考えると、よく言われる「産学官の協働」のひとつの在り方として、「学」が研究室に閉じこもるのではなく、フィールドワーク、実践を通じて地域住民と一緒にまちづくりを考え、実行して行くことは、これから全国的にも大きな広がりを見せることになると思われる。

3. 長浜におけるまちづくりについて

「地の利、時の利をうまく活かしているな。」長浜の第一印象である。関西地区と名古屋・東海地区の中間に位置している好条件もあるが、特に、日本全国（おそらくは世界各国も含めて）を闊歩している、出たがりの関西人を引きつける魅力の創出は、「うまくやったな。」と言いたくなる。その道具立てとしての黒壁の家並みや、ガラス工芸、古道具、雑貨、オルゴール、どれを取っても今の時代の気分、嗜好を反映したものとなっている。調和しているようで、中身は雑多。さすが秀吉以来の伝統か、近江商人の面目躍如といった感がある。

まちづくりに対する考え方も、おそらくは行政に頼らず、マスタープランは自分たちの力で作り上げようという姿勢ではないだろうか。商議所の吉井課長の話を聞いていると、特にそんな印象を持つ。行政機関に身を置く者としては、彦根市や滋賀県と長浜市民、地域住民と商工関係者の意識の違い、まちづくりに対する姿勢の相違など聞いてみたいところではある。

長浜のまちづくりが、これから何を目指し何処へ行くのか。現在の「一応の成功」が時流に乗り、時代の気分や嗜好にマッチしていることに起因している以上、いずれは時代に置き去りにされる運命にあるのは、冒頭に述べたとおりで、「まちづくりに終わりなし。」という吉井課長の言葉は、おそらくはそのことを自覚したものである。長浜の歴史そのものが、雄弁に物語っている筈であるから。

4. さて、島原のまちづくりはどうする？

結論だけ言えば、「それは島原市民それぞれが、それぞれの立場から考え、話し合い、自分たち自身で決める。」ということになるであろう。

ならば、「それぞれが」という限りは、一部の特定の人だけでなく、広範な市民が主体的、自立的に考え、意見を交換する「場」が必要となる。当然、全市民もれなくという訳には行かないし、興味、関心を全く持っていない人もいるので、① 特定のモデル地域において ② 興味、関心のある人が集まって ③ 地道に継続的に、ある一定の目標、目的を設定して 協議会なり懇話会なり自由な会合を設けるといふ、至極当然と言えは当然な手法が、まず考えられる。私ごときが言うまでもなく、今回の視察研修を行った、森岳まちづくりの会も、中心市街地街づくり推進協議会も、そうした集まりであり、そうした既存団体を母体とした会合の場の設定が考えられるのではないだろうか。

「それぞれの立場」、最も曖昧で、最も厄介なものではないだろうか。いわゆる総論賛成、各論反対につながるものであるし、各地における都市計画をはじめとする様々な事業がとん挫したり、空中分解した要因ともなっている。どこで折り合いを付けるか、どこまでやるのか、その調整を行うのが行政の役割と言えよう。

「自分たち自身で決める。」考えようによっては、これほど無責任な言葉もあるまい。決めるためには、それ相応の情報と判断基準が必要なのであるが、特に行政サイドからの情報提供と、判断材料の提示が決定的に不足しているのである。このことについては、私自身も自己矛盾に陥ることもあるが、やはり地域住民と行政の共同作業のプロセスがないと、まちづくりに限らず、これからの事業は進まないのではないだろうか。

今回の視察研修は、私自身にとっても様々な示唆と、教訓を与えてくれるものであった。まだ、自分自身の中で消化できていない部分もあり、具体的な提言や行動に結びつかないが、おぼろげながら以下のようなことが思い浮かんでいる。

1) 何のために、誰のために、まちづくりを行うのか。しっかりした視点と、目的意識なくしてまちづくりは語れないし、実行できない。

問われるまでもなく、誰しも共通の認識を持っていると思われがちであるが、実は人それぞれに違う方向を見ているのではないだろうか。共通の目的意識なくして、何事も進まないと考える。

2) 時流に乗るか、時流を離れても、自らの地域の将来展望を見いだすことができるのか。彦根のキャッスルロードや長浜の黒壁に、違和感やある種の嫌悪感を感じるのは、時流に乗った「迎合」が透けて見えるからではないだろうか。あるいは、「うまいことやったな。」という、妬みややっかみかもしれない。いずれにしても、本当の生活感や、まちそのものの風格、風情を感じることはできないのである。しかし、現実として人が集い、賑わいを見せている。

時流を離れて、真にそのまちの持つ歴史や人情、近所付き合いをはじめとした生活感のある空間を大事にしようとするれば、なかなか「速効性」のあるまちづくりにはつながらない。余程しっかりした将来像を描ききれない限り、目に見える形での成果は得られないのではないだろうか。

3) 地域のスケール、投下可能な資本(資金)に応じた事業の選択。ようするに、身の丈に応じたまちづくりの実践を行う必要があるということを言いたい。

長浜からの帰途、京都駅ビルを徘徊してつくづく感じたのは、「まち」すなわち地域の圧倒的スケールの違いと、巨大資本の力のすさまじさである。ビルそのものを巨大なシアターと化した「空中経路」は、大都市の持つ吸引力、魔力のようなものを感じさせずにはおかない。大都市圏に「ひと、もの、かね」が集中している現実を前に、地方の小都市が自らの魅力を高め、その魅力をいかにアピールするかを考えると、身の丈」に応じたまちづくりを地道に進めることが、最も重要であると思う。

研修団とは、私は33年間宿泊施設で働き、その間観光客誘致のため

旅館組合・観光協会の団体で年数回全国を駆け巡りました経験から

ウッ！これはちょっと違うぞ！と資料を受け取ったときから

面食らいました。それは私達の観光キャラバンは中心が旅行社相手で

その下請け的で「お客様下さい」であったと反省し、今回の研修団は

それに比べ、何月何日島原駅集合 ハイ出発、列車の中で点呼

資料渡し、そうこうしているうちに諫早駅へJRブルートレイン

30年振り乗車、列車の臭いは昔を思い出させてくれました。

慌ただしく夕食 各自ミーティング 早朝 京都着

(朝食は勝手にどうぞ) 乗り換え彦根へ向かう。生きるために！

商売するために！研修視察はかくあるべきと体で肌で感じました。

街づくり先進地視察研修

彦根・長浜 紀行文

平成11年9月3日～6日

9月3日、夕刻島原駅を出て、諫早駅にて京都市行き「あかつき号」に乗車。約12時間の列車の旅に出発した。乗り込んだ時刻が夜だったので、車窓の景色は駅付近の明かり以外殆ど真っ暗闇、それでも何処まで起きて居られるかと思ひ目を凝らしながら外を見つめていた。佐賀、博多、関門トンネルを過ぎいよいよ本州に入る。宇部、徳山、そして広島。時間は午前2時頃、明日の事を考えるとと思ひ直し寝床(寝台)に入る。起きたのは明石付近、東経135°の時計台が見えてき、回りもぼちぼち起きだしてきた。やがて神戸、大阪そして終点の京都である。

降車した後、朝食の朝粥定食でもと思ひ気や「無い」、それに時間も「無い」。仕方なく構内の「立ち食いうどん」、それも奮発して「テンプラうどん」にした。皆も同様であったみたいだ。京都からは40分程の午前9時には第一の目的地「彦根」に到着。。駅より10分程度で商工会議所に着く。

会議室にてこの町の概要、商店街の取り組み及びTMO構想について話して貰う昼頃になり説明と質疑応答も終わり、今夜の宿舎へ向かい、荷を預け昼食を取りに散々町に出ていった。朝起きが早かったし、そこそこお腹も減っていたので此処まで来たらと思ひ名物の彦根牛の店に入った。

上ステーキ8,000円、並でも5,000円ちょっと高い気がしてすき焼き定食にした2,000円であった。皆とこれからのコースを相談し店を出た。外に出ると雨も上がり好天気になってきた。彦根の町並みとそれぞれの商店街を視察する。駅前、京町通り、市場、登り町、銀座、中央の各商店街を歩いて見てその後、夢京橋キャッスロードに入る。前者の街はそれぞれに工夫はあるだろうが、土曜日だということに客も少ない。駅前商店街だけは場所柄、JRの乗降客であろう歩行者が多かったがこれは買い物客ではない様に見えた。。それらに比べて後者は街の作りが綺麗だし、道路(車道と歩道の幅)もゆったり取ってある。さらに各店そのものの作りが凝っている。お城に通じる道のせいだろう意図的に昔風に作り買物客より観光客用の町並みであった。女性数人のグループや老年夫婦のそぞろ歩きを多く見かけた。それと物産店等には結構見物客が入っていた。一通り回り

、最後にやはり彦根城に向かった。ここのお城は島原城と違い山城である。表手門から各櫓を通りそれからの道は登り坂。相当なきつさである。

やっとの思ひで天守閣にたどり着き、拝観料を払い、城内を見学させてもらった「さすが国宝」、井伊直政が400年前の関が原の戦いの後、築いた城である外観は新しいが内部は昔の材木のままである。石田三成或いは、羽柴秀吉という歴史上の人物をも思ひ起こさせる。さらに眼下に琵琶湖が見える。日本一の湖のその側に建てられた壮大なお城、納得いく景色であった。更に奥の「玄宮園」に向かい、庵にて「茶を一服」。大きな池を眺めながら、その昔この城の殿様、お姫様、家来、それに腰元と自分なりに配置しそれらを想像できる風景であった。城を下り元の通りに戻ったが、何か引っ掛かる? 「何かな何かな」

そうだなーミングである。「夢京橋」は良いとしても、「キャッスロード」はどうか和訳すると「城の道」か「城への道」又は「大(表)手門通」であろう。古いよさを生かし新しい活気みなぎる町、いわゆるOLD・NEW TOWNのコンセプトの元に名がつけられただろうが、私にすればもう一工夫した日本語の方が似つかわしい表現のように思われた。とにかく素晴らしい商店街とその町並みの景観であった。しかし我が商店街にこれを持って来るのは無理がある。7-ケドを撤去し道路を広げ町を昔風に作り替える。そんな事は出来ないだろう。7-ケドが有ってこそ商売がし易くなるし向こう三軒が接近していればこそ、お互いに助け合う事も出来る。見ることは良かったが学ぶ事は余り無かった様に思われた。

その後他の商店街も再度見学し宿舎に帰った。夜には地元の関係者の方々と懇談し布団に入った。翌朝は7時起床、朝食を十分取り午前9時17分発の列車で第二の目的地「長浜」に入る。快速列車のせいか16分程で着いた。この町も彦根市同様、琵琶湖の側に立地し人口5万8千人の城下町であるが、城と町が駅の東西に分布し、町側には御坊さんで親しまれている真宗大谷派「大通寺」が有りその寺の回りに町が集まり商店街を造り、どちらかと言えば門前町の様である。廃れている通りもあるが表参道とその付近は、日曜日のせいか観光客(買物客も含む)が多く、幅の狭い通りにごったがえしていた。長浜にはいわゆる何々商店街という名称はなく、東西に延びる駅前通りと、城外堀跡に出来た道路それに国道8号線の2本の南北に延びた道路に挟まれた土地に商店が出来、商店街が発達

したように思われた。この町も彦根市同様アーケードを撤去し店先を揃え特徴ある商店街に仕上げてある。違うのは町並みを改修する際、道路を1m程拡張しただけなので丁度いい幅になっているのである。彦根は道路が広すぎて何となく閑散の感があったが、こちらは賑わっているという感想であった。長浜の町にはガラス工房が何軒か有りそれに伴うショップ、ギャラリーそれらと関係のある店舗にはおおくの若いギャル達が買い物をしていた。この近隣には陶器、陶磁器の名産地があると思っていたが、若い人には透明感のあるキラキラしたギヤマンの方が受けるのかもしれない。商店街を一周した後、皆と離れて一人で長浜の城を見に行く。だがこちらは彦根城に比べて粗末な造りである。公園の中に天守閣だけが1つポツンと建っている。これじゃ天守閣の名を借りた博物館だと、写真を1枚撮り早々に引き上げた。帰り際チラリと高札を見ると、やはり「長浜城歴史博物館」と記してあった。歴史的には羽柴(後の豊臣)秀吉が浅井・朝倉の連合軍を姉川の戦いで破り、その後、浅井長政の居城 今浜城を攻め落とし、お市の方と3人の姉妹を救い出した功績により織田信長よりこの地を任され、名を長浜と改め、初めて城持大名と成りえた土地である。その後姫路に移ったが秀吉の善政により柴田勝家との賤ヶ岳合戦の折りには、地元の町民、百姓は事々く味方し敵を破ったという。そういう事があったのかと思う程、城は静まりかえっていた。

「露と落ち 露と消えにし・・・」ではあろうが、私にしてみれば「長浜のことは夢の又の又の夢」である。それでも城を振り返りながら、ふと遠くを見るとそこには琵琶湖があった。人間がどんな立派な物を造ろうと自然たる自然には勝ることが出来ないと感じた。駅に帰り列車にて京都に向かい、島原への帰途につく。今回は2つの都市を視察したがそれぞれに特色があり、又城下町という共通点もあり、見るべき所が非常に多かったように思える。今後各々の町の長所を吸収し我が商店街の活性化に役だててゆきたいと思う。

最後に今度の企画を発案した方々と、同行の皆様にお礼を申し上げます。

島原市下通り商店街

平田 正誠

銭湯にしよう！

一彦根・長浜視察レポート一 矢部文俊

☆何が良かったって？

前回の‘彦根・長浜・玉出商店街視察研修報告書’の一部に目を通しておいた成果か(?)、はやる気持ちを顔に出さないよう内唇をかるく咬みながら、スポンサーの助手席で集合の諫早駅へ急がせる。

まず話は脱線するけど、最近このスポンサー、妙にわかりがいい…“森岳の連中と…”でだいたいO・K。昔は結構サバ読んで頂戴していたが、変に解り良すぎると、人のサガが正直に2万円です！としか言えなくなってしまう。森岳の人々がどんなに良識派か悪人の集団かも判っていないと思うんだが…。まあ強いて言えば、彼女の仕事の都合で、森岳アドバイザー“鮫島先生”との連絡役を担ってもらっているから若干の連帯感でも生まれてきたのかなと思いつつ、プラスアルファの軍資金にペロリと舌を出す。更に吾が故郷からエッチラ(3年前に)運んだ‘夕張メロンワイン’と壱岐の友人から(これまた1年前に頂いた)‘壱岐のゆずリキュール’を片手に下げながら(これが結構重かった)、内気なスポンサーから強引に駅裏で降ろされ、地下道をフウ々言いながら、やあ、もう皆さんお集まりだ！それでは早速、第1目的の準備をしなければ…

貧乏学生の頃、帰省は列車に決まっていたが、ほとんどは‘座席車・雲仙’、ブルートレインなんて何回乗ったか？心は30数年前に飛んで(枕投げはさすが…)、でも皆様の手前、初めのうちは若干神妙な顔つきで…それも、肥前山口でドッキングする頃には…。まずは第一目的にうまく入れたぞ……。

お誘いいただいた‘特使’からは事前にあまりにも沢山の資料を頂いて、目を通さなければと思えば思うほど、3行程で暇が下がる。“TMOですよ、これからは！”特使の声がちいちゃな脳に木霊するが、3流建築やの悲しさか…。それを差し引いてもブルートレインはよかばい、交流が大事やけんね！

でも、あたくしめの寝る場所が無いじゃないの？それでは、さっさと上段へ、思いの外、ここは良かった。特使先生から、詰問されることもなく、ちょっと超越した気分にも浸れたし…。なんせ、あたしゃヒゲの私人だもんね…。同じ車両の見知らぬお客さん、ミーティングルーム前を通る度、不服そうな眼を流す。禁煙車だというのに…。でも片目をつぶり、今日は私人なんだと胸の内で呟く…。

翌朝の大失敗。近代的な(?)京都駅ホーム内の‘立ち食いそば’常連の皆さん“朝飯はこしかない”とおっしゃるので、他人の頭の上から慌てて天ぷらそばを注文し、汗を吹き出しながら流し込み、列車待ちホームで車両番号札下に並び、目に入ったのは、優雅におコーヒーをそそり、モーニングセットにかぶりつく会長と後にヒーローとなる阿部記者ではありませんか。朝、米飯は食さない自称‘珈琲かぶれ’もこれにはまいった。ゆうべ(?)のお水がまだ頭のあちこちに…ああ、残念無念、今日は不吉ばい！

☆彦根で思うこと (3 流建築屋独白)

会議所足立さん、なんやよう判らんかった。

登り町会長小椋さん、敬意を表します。しかし、ハンサムだったのであまり好かん。行動力有りそう。どこからあのアイデア出てくるのだろう。あれはきっと‘ブレーン’がいるに違いない。あんまし、森岳をなめたらあかんで！てなこと思いながら、話半分？(これじゃ、先が思いやられる)早う街が観たいよ！

夢キャッスルロード、あれは何じゃ？セットかい？でも、女性客にはうけると思うよ。個々にじっくり観ればいいのか？とも感じた。中壕近くの和菓子屋さん(名前忘れた、やっとおコーヒにありつけたっけ)のお庭はグット・グット。それとキャワイイ招き猫が呼んでる蠟燭で灯る行燈(一つ欲しかったな)。

長濱先生たちとちょっと別れて、『玄宮園』・・・ああ、至福の時を過ごした・・が、その後がいけなかった。黒門から本丸へ、そして大手門へ下る。もう、年じゃなあー、あの高低差。しかし、広いよね、島原城もこの半分でもあれば・・武家屋敷通りから森岳までまとめれば、いけるのかなあ？とか思いながら。

足をひきづって“花しょうぶ通り”おっ、これはいけると思うよ！【何とはなしの統一性の中での独自性】、森岳ってこれじゃない？遊郭の跡にしてはお白粉(俗に言う化粧)を感じさせない。うれしさが、懐かしさがふっと過ぎる。圧巻は「災い転じて福となす」。高級ホテルの浴場は私めがご入浴するにはきっと相応しくなかったのだろう、ご案内されたのが、近くの“うめ玉湯”。ご同行の面々の嬉しそうな顔！

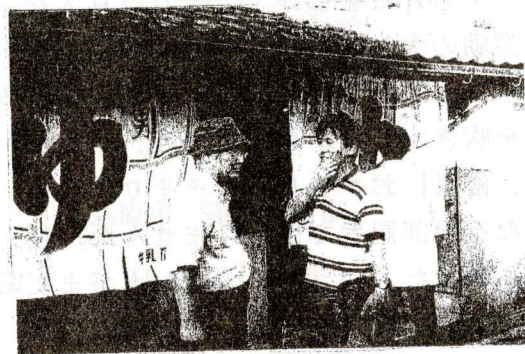
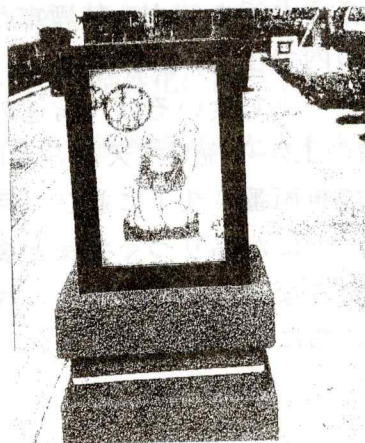
これしかないね、‘市福の跡利用’は。日本人にはぜったい銭湯がいるのだ！理由はいらない。あとは入りたい人々がへ理屈をつければいいのだ。論より証拠、後からあとから、メンバーのほとんどが、いらっしゃるじゃありませんか。今朝の憎つき阿部さんもM氏と手と手を取り合って、ご一緒の現れるではありませんか！午後の自由視察から注目されていたとは知らずか、知ってか？でも良いことですよ、人類みな兄弟。隣人を愛すべし…。旅先での激情も良いでしょうが、なるべくなら一生大事にしてね！

少し昔のおじちゃんには、「3丁目の夕日(西岸良平)的」世界が懐かしい！

と、いうことで、おわりよければすべてよし。今朝の恨めしげな‘おコーヒー’なんて、もうどうでもいいのだ。これで、研修の9割方済んだ。明日はのんびりと…。

(銭湯前で)

招き猫行燈



☆長浜では

もう一つ早い電車で行ったら良かったかな？それにしても観光客の多いこと。何時までも来てくれるのかなー、ちと不安になったが、すごいですね、商工会議所の吉井課長。あの早口にほとぼしる自信。島原にも一人は必要かもね！

黒壁は街の通りしか観ていないので言明できないが、時間があれば(2～3日)分析してもいいかな？ただ、通りが違えばガラーンとするところが侘びしい。一寸した川端にいい雰囲気の家もあつたね！

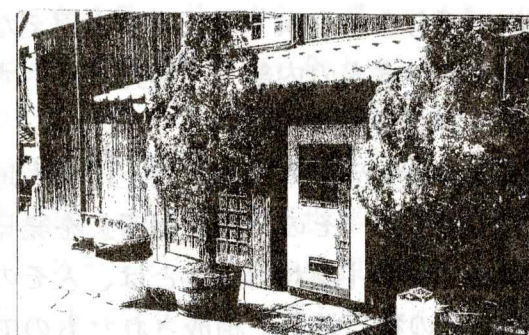
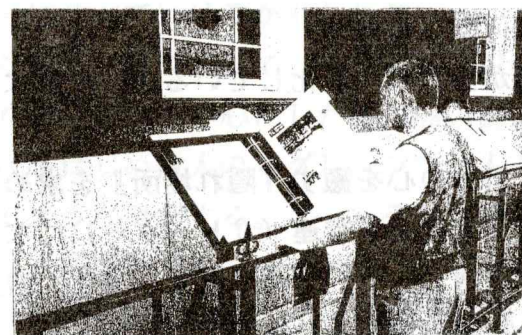
まちづくりにかける心意気はたいしたものを感じたね。特に路上に設置しある‘見開きインフォメーション’露骨に人目に晒さない‘自販機’等々、採り入れるところは沢山あると思った。

一見限りの観光じゃなくて、生きてく中での色々な想いをもったとき、自然に足を運び、明日の生きるちっちゃな力を譲ってあげられる、そんなまちが欲しいな、‘そば八’の一押しのそば“十六文”と“おろしそば”を真樹子さんと勝負しながら考えていた。

ここでも又、抜け駆けし、北国街道『安藤家、古翠園』・・・2時間ほど居眠りしていたかった！皆さん勝手してごめんなさい。なぜ、自然を生かした庭園とは、こんなに心和ましてくれるのだろうか？

(黒壁街かどインフォメーション)

(目立たない自動販売機)



☆私人としてのおもい

彦根にしろ、長浜にしろ間違いなく先進地でありました。教訓は山ほどあるでしょう。参考とし、採り入れるべきものも沢山ありそうです。

何れにしても、そこに住まわれている方々が、どのようなまちで、どのように生活していくかを主体的に表現すべきかなー、との感をイメージしました。誰にも遠慮することもない、誰かと同じ事をする必要もない、ただ、同志の調和は考えて欲しい。何かをするため、激論はあつてしかるべき。そして、最後にまちの皆さんの笑顔が絶えない街、私どもが歩いてもうれしい街であつてほしい。

そして、街の皆さんが、旅の人々が、なにより私が気楽に入れる“ふろ”、そこは笑いがあり、愚痴がある‘癒しの空間’。

四年振り二回目の彦根長浜一泊四日間視察研修旅行に関するレポート 猪原信明

金曜日一杯仕事をして夜汽車に乗り、移動時間を睡眠時間にあて、目が覚めると目的地へ直行、いきなり視察研修が始まり、夕食は現地の人達との交流会にあて、疲労で眠る。翌日は早々と次の視察地へ移動、研修を終え、夜汽車に乗って帰路につく。目が覚めると月曜日の朝で、帰宅するといきなり仕事。何か言い訳がましいスケジュールである。では、一体何に対して、誰に対しての言い訳なのか？ 本当は楽しかったくせに…。

気づいている人もいるだろうが、「視察研修」、「団体行動」、「夜行列車移動」と、この旅行形態には【修学旅行】のノスタルジーが色濃く反映されていて、「レポート提出」で完璧に酷似する。修学旅行と違うのは、堂々とお酒を呑めることと、マクラ投げをしてはいけないこと位だ。

「彦根…夢京橋キャッスルロード商店街と地元商店街との温度差」

四年前の彦根視察は都市計画道路にかかる旧商店街の町並みが、徹底した町並み計画により劇的に生まれ変わり、観光客が押しかけるようになった「夢京橋キャッスルロード」の成功事例が中心だった。当時の感想は今も変わっていない。

すばらしく美しい完成された町並みであり、倉敷と同様に建築雑誌の表紙になりそうなその《珍しさ》に観光客や視察団は大勢訪れるであろうし、お金も落ちるはずだ。

しかし「もう一度来てみたい」と思えないのは何故なのか？

それは我々日本人の内部で「観光」に対する認識が少しずつ変化しているからではないだろうか？

我々は《日常生活以外の場合＝例えば観光地》に、自分の心を癒す『隠れ場所』を求め始めたのだ。その『隠れ場所』を発見した時、人は必ず常連（リピーター）になる。

人の心を癒す『隠れ場所』とは、人そのもの、人情、生活、習慣、歴史、文化、自然等その【地方の独自性】で構成されたものであり、物語を連想させなくてはならない。

要するに、即座にお金だけでは作り出したり買ったり出来ないものなのだ。

「夢京橋キャッスルロード」の整然とした町並みには、今回もやはりそこに住んでいる人たちの個性や生活の匂いをほとんど感じる事が出来なかった。

彦根の地元商店街の小椋氏が指摘されているように、キャッスルロードの設計者は、地元の生活者や独自性より、観光客や中央を意識して設計したのではないのか？ そして徹底した「町並み条例」による統一美は、注意しないと【地方の独自性】を抹殺する。

もしも視察団の中に、多額の資金を運用することが出来て、無条件にこの町並みを模倣するところが多くなると、一体どうなるだろう？ 全国津々浦々にキャッスルロードもどきが出現し、同デザイン、無個性で悪名高き『駅前再開発事業』や『道の駅』と同じ道をたどる事にならないか。

大津市の琵琶湖沿いに博多のキャナルシティとまったく同じ建物が建っているのを発見し、唖然とした事を思い出す。

彦根市登り町商店街の「まちづくり」のスタンスは森岳商店街や森岳まちづくりの会と非常に近いように感じた。時代に取り残され寂れてしまった商店街が次の時代に生き残りをかけて必死で模索を繰り返している。

お金のかかる大きな事はできないが、その分熱意とアイデアと努力で「手作りのまちづくり」に夢を賭けている…。

しかし、地元商店街を視察して、【商店街】のおかれていた厳しい現実を実感した。

ほとんどの店舗の店主の年齢が60代以上で、後継者のいる気配が感じられないのだ。

5年前に、直方の中小企業大学校に派遣され、講義で聴いた「2005年までに商店街の半数はなくなる」という予測が脳裏をよぎった。

戦後、20代の若い夫婦で商売を始め、苦勞をしながら経営を軌道に乗せ、世界の歴史上、空前絶後といわれる「日本の高度経済成長」で繁榮を極め、子供を大学にやり、一流企業に就職し、日本経済の推進力になってくれることを願いつつ、都会で生活する子供達の立身出世や幸福を想い、仕事に精を出しながら、地域に貢献しながら生きてきた。そして気がついたら60代、70代になっていた。だから後継者はいない。そういう店主が多いのではないだろうか？ 自営業には定年制がないから80代でも働くことは出来るが、肉体は永遠ではない。

2005年はそのタイムリミットなのだそう。

商店街の数は減らないだろうが、商店の数は何も手を打たないとあと6年で本当に半分に減るかも知れない。市場経済の原理は我々《経済弱者》だけでなく、大企業にも容赦はしない。夢京橋キャッスルロードは最低あと10年は何もしなくても観光客で十分に食べていけるかもしれない。

しかしハウステンボスやシーガイアも数年前にあれだけもてはやされて、今は数百億円の累積赤字で出口なしという例もある。

登り町商店街を中心にした地元商店街は現状のままでいくと、かなり厳しい状況だが、小椋氏をはじめ数人のアグレッシブな人達が頑張り続ける限り、いつかきっと未来が拓けてくるような気がする。そして特に「環境問題」は急を要する世界全体の問題であり、ゴミ問題をまちづくりとリンクさせた「エコ・ステーション」の発想は我々に多くのヒントを与えてくれた。

滋賀県立大学の学生グループ「ACT」とのタイアップは、「まちづくり」に若者の発想、理論武装、マルチメディアへの進出という理想的な要素を加えているし、学生にとっても机上の学問から生きた学問への脱皮を実現させている。

森岳商店街も学生とは無理にしても、女性達とのタイアップは急がねばならない。女性は最大の消費者であり、観光客でもある。そして文化的レベルにおいても、男性に大きく差をつけている。恐るべし女性パワーを味方つける事が商店街を危機から救う。

話を元に戻すが、果たして商店街の社会的役目は本当に終わってしまったのだろうか？ 自動車社会の到来、大型店の進出、通信販売の浸透など商店街にとって状況は悪くなっていくばかりであるが、中心市街地の経済的陥没は「状況」のせいだけではない。

問題は我々商工業者の資質にある。そもそも商売とは時代の変化に適応して初めて、存在しうる職業ではないのか。「まちづくり」も「商売」も完成されたものなどありえない。時代の変化に適応しながら、継続していく【行為】そのものであり、

それに必死に関わる人間達の【生きざま】そのものなのだ。

もし、自らの所属する町や商店街に誇りや愛情を持っている商工業者ならば、自分の店の利益追求だけでなく「まちづくり」に何らかの形で参加してきたはずであるし、その町の歴史、文化、伝統、習慣など【地方の独自性】を維持継承する一翼を担ってきたはずだ。

今、時代は大きな転換点にあり、「本物志向」が確実に主流になりつつある。欧米や中央の真似事では通用しなくなった分、地方のオリジナリティーがますます重要になってくるし、地方の独自性を生かすことでしか、地方の生きのびる道は残されていない。

商店街の社会的役割はまさしく、地域の存続を左右するほど重要になっているのだ。寂れているからと卑屈になることはない。四国の内子町も湯布院も日田の豆田町も黒壁も高度経済成長に乗れず、寂れたから壊されず生き延びて、住民の熱意と努力で現在、生き返って脚光を浴びているのではないか。自分の住んでいる地区に愛情と誇りを持ち、もう一度独自性を再発見し、「まちづくり」に取り組んでいけば道は絶対に拓ける。

だから我々は【島原の素晴らしさを一番わかっていないのは島原の人間だ】という認識を一刻も早く持ち、自分の地区の個性や魅力を数多く発見する作業から始めなければならない。

若者や後継者がふるさとに帰って来ないのは、職場がない、刺激がない、などの理由からだけではなく、「自分のふるさとに未来を予感することができない」からだ。

住民が自分の町の将来のビジョンを描くこともせず、「まちづくり」の努力もしていない町に未来を予感させることは不可能であり、若者は絶対に帰って来ない。

今は何もないけど、大人達がんばってて、何かが生まれそうな、ドキドキするおもしろい町なら、都会生活との天秤にかかるはずだ

子供たちに帰巢本能を植えつけるのは、大人達のふるさとに対する並外れた誇りと愛情しかないと思えるのだ。彦根にはあと10年後にもう一度来てみたい。

「長浜…日本一理想的な成功事例【黒壁】と日本一現実的な成功事例【表参道】」

彦根は観光客誘致で一躍脚光を浴び始めた夢京橋キャッスルロードと地元住民密着型のまちづくりを目指す登り町商店街を中心にした地元商店街との温度差、対立構図を垣間見た気がしたが、長浜は少し異なるようだ。

10年前には寂れていた人口わずか5万8000人の町は、今全国から熱い視線を浴びている。

官民一体となったまちづくり構想の口火を切った、第三セクター「株式会社黒壁」は、東証一部に株式が店頭公開された伝説的成功事例となり、陥没していた中心市街地を一変させた。それと並行して「ながはま御坊表参道」が民間投資のみで見事に生まれ変わり、多くの連鎖反応に弾みをつけ、いよいよタウンマネジメント(TMO)構想による事業化に着手しようという段階まで来た文字通り日本一のまちづくり成功地だ。

町の中でその使命を終え、取壊しを待つだけだった黒壁の建物と大通寺門前町の寂れた

商店街が主人公なのだが、双方はネットワークによる全体構想に緻密につながっていて、観光客だけに依存せず、中心市街地に再び多くの定着住民を戻す仕掛けを着々と進めている。高度で理にかなったおそらく究極のまちづくりであろう。

我々島原は官民共、長浜のレベルに比べれば問題外だが、歴史、伝統、自然等の素材においては決してひけをとらない。あとはやる気と努力と【思い込み】だけだ。

表参道の小倉氏はまさしく、やる気と努力と【思い込み】の強い魅力的な人物だ。島原が第一にしないといけない事は、時限立法であるTMOに慌ててエントリーする事ではなく、島原を将来どのような町にしたいのか？ まちづくりの構想に関する官民の激しく真剣な議論ではないだろうか。

「森岳商店街の具体的未来構想に関する一個人的考察」

現在、森岳商店街の当面の目標はまちづくりに絡んだ【理髪館】の修復再生工事である。かの有名な雑誌『サライ』にも写真掲載された大正ロマンの魅力的な建物を、森岳の未来にどのように生かしていくか、おそらく今後の森岳にとって大きな分岐点になるだろう。

一昨年前の弦燈舎と街路灯、昨年速魚川が森岳に誕生して、県内外の来街者が少しずつ増加している。さらに酒蔵でのジャズコンサートや骨董市、各ギャラリーでの文化イベント、森岳文化祭、春爛漫陶器市等々、次々に手作りのまちづくりを展開している。

いずれをとっても商売人にとって販売促進に直接は結びつかない活動ばかりである。ところが、算盤勘定を度外視したこのような【思い込み】のエネルギーに人は共感し応援したくなるものらしい。思えば《感動》とは常識を越えたところに生じる事が多い。

森岳商店街は森岳城(島原城)が築城された400年程前に、島原藩が意図的に作らせた町人街が前身であり、商家の隆盛の元で多くの交流人口があり、いろんな町人文化が生まれていった事は想像に難くない。当時の町人まちの血縁ではない遺伝子が今、森岳に再生して『森岳・町人まちルネッサンス(文化復興)』が燃え上がっても不思議ではない。

森岳商店街は時代の流れとその特性から、一昔前の「商店街の賑わい」を取り戻す事を放棄し、「心豊かな時間を過ごせるまち」を目標に掲げて別の道を歩み始めた。

具体的に各商店が特化(個性的専門店化)しなくてはならないのであるが、戦後最大の深刻な大不況は、先行きの不安感から各個店の魅力的特化にブレーキをかけたままである。

ただしリスクを負わないで現状維持が出来るほど今回の状況は甘くないような気がする。速魚川ギャラリーでは年に約6回のペースで作家の個展などの文化イベントを消化しているが、いろんな意味で勉強させてもらっている。商品の選定や企画、ディスプレイにこだわりが出てきた分、金物店の店舗に反映してきたような気がする。

酒屋が銘酒と作家の徳利やお猪口展を企画したり、各業種の店が意外な組合せでイベントを企画し、それが森岳の文化スタイルとして確立する日が近いのではないだろうか。

まちづくりの『総論』に賛同し参加すると同時に、個店がリスクを怖れず、勇気と強い【思い込み】で『各論』を実践する事がいかに重要かを確認した視察研修旅行だった。

平成△△年△△月△△日 (車中夢)

長濱七郎 ①

平成△△年△△月△△日 (快晴) 今日は大安吉日。午前10時、森岳商店街に15店舗目の新店舗OPENの日だ。数年前には、大正ロマンの小林理髪店跡と宮崎酒店酒蔵が県と市の補助金により立派に出来上がり、今はすっかり街に根付き観光客と地域の人たちとの交流も盛んにおこなわれているようだ。

テープカットがもうすぐだ。以前から街の発展に尽し先頭を走っていた当時の役員の人々は今はすっかり好々爺になり、今日揃っての出席だ。思えば遠くへ来たもんだの言葉ではないが、ここまで来るのには随分長い道程だった。あそこに行けば良い街が有るよ——と聞けば飛んで行き、新しい街づくりと聞けば馳せ参じ、西に東に右往左往。平成7年と平成11年の滋賀県彦根市と長浜市の強行軍の視察研修旅行、車中での白熱した議論、彦根・長浜にあり島原に無いもの、島原にあり彦根・長浜に無いものを消去法の一つとして比較検討した結果、本日のOPENINGに結びついたのかと思うと感無量だ。他の都市の商店街に無いもの、それは地域住民の生活と強い絆で結ばれた地域密着型商店街+観光客が心豊かな時を過ごせる街、人と文化の交差点、住民の心の優しさであり、旅行者が立ち寄り、お茶一杯での地域の人々との語らいの中で島原が好きになり再度、訪ねてきてほしいという願いを込めてOPENしたのが森岳再来館だ。ネーミングがいまいちの感がする。外観は純和風で切妻造りの様式、前面に2台の駐車スペースがあり、敷石・錆び砂利を敷き竹林と櫓が見事だ。

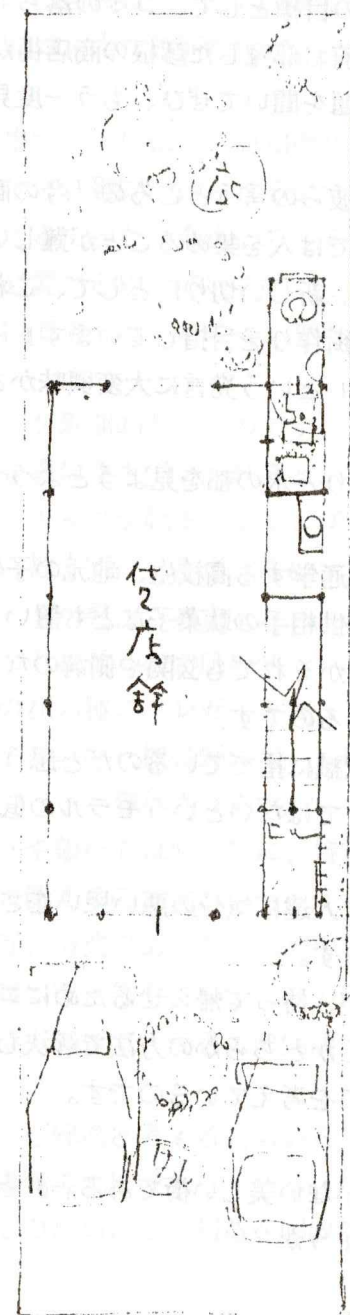
1階を覗いて見ると旅行企画会社経営のインフォメーションセンターの様だ。島原市の委託を受けて観光案内所とプレイガイドも兼ねているらしい。奥にはツーリング用のバイク置場・貸自転車もある。近々コイン式のシャワールームも出来るらしい。奥の明かり取りの庭がすばらしい。

2階は個人の住まいと小さいギャラリーが有ると聞く。こざっぱりしたところで、森岳商店街の散策だ。10数年前僅か3軒程度の店舗から始まった街づくりも今や、県下有数の地域密着型観光地となり手作り民芸店手打ち蕎麦や、理髪店も既存のパラペットを外し和風になり繁盛しているようだ。

道路も浸透性の高い床材を使用、側溝も大きくなり大雨時の排水も安心だ。

②

道路の平面計画もいづらか雁行の設計だ。これなら自動車もスピードが出せず、これなら大丈夫だ。歩行者も安心して歩ける道路になった。家も、車も、人間も、犬も、猫も共存共栄だ。地域の人々は今日の晴れがましい日を迎え浮き浮きしている。老人たちは昔は良かったと言う言葉より、長生きしていて良かったと言う言葉が多く聞かれるようになった。昼間の人口もずいぶん増えたそう。点が線になり、線が面となるように——と石野先生の話思い出して感無量。ああ彦根・長浜に無いものを作り上げたぞ。力んだ途端ゴットン停車！ 次の停車駅は諫早です、島原鉄道をご利用の方はお乗り換えです——のアナウンスで目が覚めた。



彦根・長浜の視察を終えて

森岳まちづくりの会 代表 小川泰一

9月3日夕方に寝台車で島原を出て、6日の朝に帰ってくるという強行スケジュールで滋賀県彦根市と長浜市の視察に行ってきました。

実はこの場所は、私たち「森岳まちづくりの会」で4年前にも視察をした場所だったのですが、もう一度行くことになったことは彦根や長浜が以前と比べてさらにどのような変化をしたのかを確認するためにも有意義な事でした。

前回の視察の目的は、古い町並みを生かした町並み形成・街づくりの先進地を見学することと、街づくりに対する住民側の考え方や実践してきたハード事業、ソフト事業のやりかたを学ぶためでした。それらを参考にして我々は「島原でもできること」を次々と実行してきました。

今回私は次ぎなる「森岳まちづくりの会」の目標として、ゴミの落ちていないきれいな街づくりをめざそうと思っているのですが、以前お邪魔した彦根の商店街が面白い提唱の仕方で、環境美化に取り組んでいるという話題を聞いてぜひ、もう一度見に行きたいと思ったのでした。

私は森岳商店街の一員でもありますので、彼らの言うところの「今の商店街では従来の手法である『売出しセール』をやることだけでは人を集めることが難しいだけでなく、会員に協力させることすら難しい時代である。新しい切り口として、これからの地球規模の環境問題を考え、『人と街にやさしい商店街作りを目指しています』というアピールをするという手法があってもいいのではないか」という発言に大変興味がありました。

わが町、島原にも普賢岳災害以降の復興ぶりと水の都を見ようとようやく観光客が増えました。

ただ、私が残念に感じていることは、市民や通学する高校生、地元の子供たちが道に平気でゴミを捨てていることです。私の店では子供相手の駄菓子なども置いてあるので特に気をつかい、ごみ箱を4つも置いているのですがそれでも玄関や側溝のなかにあきらかに、うちで買ったお菓子の袋や空き缶が捨ててあるのです。

決して意地悪で捨てているのではなく無意識に捨てているのだと思うのですが、そこが問題です。捨てるのは当然。別に大したことではないというモラルの低さが恥じるべき行為なのです。

せっかく島原に期待して観光に来てくれた人達に気分の悪い思いをさせるばかりでなく掃除をする人の苦労を増やすことにもなります。

今の観光地にはつきもののゴミ問題ですが、持って帰らせるためにゴミ箱をあえて置かないという方法とか、逆にゴミ箱を増やすとかどちらかの方法で解決しようとするのがふつうですが、それに対して私は新しい切り口を考えているのです。

もし、『島原はゴミが一つとして落ちていない美しい街である。』ということが住民や外来者の共通認識になっていればどうでしょうか？

万が一ゴミがたまたま落ちていたとすると、それを見つけた地元の人はわが町の恥とばかり急いで拾って近くのゴミ箱に捨てる。または自宅に持ち帰る。

外来者も島原でゴミを投げ捨てていくのはモラルに反するなげかわしい行為であり旅先で恥をかけないと、気分良くゴミ箱に捨ててくれる。

そう、この「気分良くゴミを拾う」とか、「気分良くゴミ箱に捨てる」とかが当たり前に思われる街を作り上げることがまさに『まちづくり』であり、『まちづくりはひとづくり』ということの究極のありかたではないだろうか。と考えているのです。

月に一度の決められたゴミ拾いの日という、レベルの低い美化運動ではなく、黙って拾う人の姿を自然の状態として見せてあげて、投げ捨てる人の心に訴えることがあっていいでしょう。

投げ捨てるをする子供たちに対して、よそのおじさんがきちんと注意ができる街は素敵な街だと思います。

「ふるさとの自慢は？」と人に聞かれて、「水がきれいでゴミのない美しい街」と答えられたらそれは、当たり前だけどとても素晴らしいことだと思います。

ただこの事が、人に伝え、周知徹底されるというのは難しいことです。みんなに興味を持たせるように、賛同が得られるように伝えなければなりません。

それを伝えることが「森岳まちづくりの会」の役目ならば、いろんなアイデアを出して見る必要があると思っています。

今回の彦根でやっていたのは、空き缶とペットボトルの回収機を設置することでした。

このやり方が画期的だったのです。

まずこの回収機に空き缶を入れると、機械にパソコンの画面が付いていて、サッカーのペナルティーキックが始まります。ゴールキーパーがボールをつかめば「アウト」と音声流れ、数十回に一度ボールはゴールに突きささり、観客の歓声とともに機械から一枚のレシートが発行されます。

そのレシートは近くのお店のサービス券であったり、温泉旅館の宿泊券であったり、商店街からの花の種のプレゼントだったりするのです。

ペットボトルの回収機は野球ゲームになっていて、外野手に取られればアウト、ホームランならレシートが発行されます。

行政サイドや銀行では原則的に、特定の所だけのサービスをできないとのことで、普通の回収機を設置するのですが、せっかく設置しても利用者が少ないということでした。

本来ならば、特典のあるなしにかかわらず利用すべきでしょうが、現実は無邪気な子供たちは、道端の空き缶や、ジュースの自動販売機の脇にあるゴミ箱の中にたまっている空き缶さえも持ってきて、商店街の回収機に入れるそうです。

こんな方法を邪道と考える人もいるでしょうが、リサイクルを面白く、楽しめながらやられてそれが環境美化に役立っている。なおかつ商店側もサービスを受けるために来店客数が増えて、そのために出た利益を回収機の運営費として「広告宣伝費」の名目で出資する

という形で協力する。とまあ正に民間ならではのアイデアでよく考えられているなあと、大変感心させられました。

またこの商店街では、アフリカ原産の「ケナフ」という植物を歩道端にプランターで植樹して町なかの緑化推進もしていたのですが、これもまたすぐれものでこの「ケナフ」はCO₂を多く吸収して酸素を作るという光合成能力が抜群の一年草で、その葉は和紙を作り、その茎は火持ちのいい炭を作り、また茎を乾燥させれば杖にもなるという無駄のないリサイクルの樹木と言われているそうです。

この「ケナフ」を島原で植えても果して誰が和紙を作り、炭を作るのかと考えたらそれこそ植えてもあまり役立てられないかも知れません。でもそれは無駄な努力でしょうか？

大事なことはそれを植樹しているということをみんなに知らせて、みんなで環境問題を考えましょうと伝えることです。

空き缶やペットボトルの回収機を置くことも決して商店街の宣伝だけではなく、それをリサイクルと環境美化を考えてもらう手段として活用することが第一の目的であるべきです。

和紙や炭を作れなくても乾燥させて杖を作りお年寄りにプレゼントすることはできますし、子供たちにゴミの投げ捨てがいけないことだと、注意や説教でなく当たり前のこととして身に付けさせることはできるはずです。

そうです。私たち小市民は自分たちがやれる範囲のことを努力してやればそれ以上は、したくても自分たちの生活にまで負担をかけるので、できないのですから。

「森岳まちづくりの会」では、自分たちが住みやすい街こそ観光客にとっても魅力的な街である。という考えのもとに住民が、より住みやすく楽しみながら生きていける街を目指すことが、会の目的であると考えているので、私はこういう情報発信をしていくことこそとても大切な作業だと考えています。

ただこの回収機を設置するとなるとかなりの費用が必要になることが最大の問題です。私たちのグループは利益を生み出すための団体ではないので、なんらかの補助金制度を、利用させていただくことを考えなければならないのですが、それでも弱冠の自己資金すら負担することは困難であることから、会員のなかではすでに「高嶺の花」とあきらめムードの意見が出ていて、「時期尚早である」との、なんとも納得しがたい結論が出そうな気配があります。

ただ、物ごとを実現させる方法として私が最近よく考えることは一つにはみんなで話し合いをして、充分納得した上で実現させるという方法がありますがこの方法は、えてして理解し合えるのに時間がかかりまた、総論は賛成でも各論の部分では協力をとれない部分が出てきて実現は困難であることが多いようです。

もう一つの方法はまず最初にだれかが率先してやってみて、現実（または現物を）実際見せて理解してもらうという、「百聞は一見にしかず」というやり方のほうがより早く、実現するのではないかなと思えることがあります。

いいことは人が真似をします。「いいこと」の内容が利益の出るものであれば、誰もが少々出費をしても真似をします。

それを「利益」ではなく「気持ちのいいこと」でも真似をしてもらえるように仕掛けなければなりません。

なんとか「森岳まちづくりの会」が最初に見本を示せばいいのですが、かなり高いハードルです。

今回お世話になった彦根や長浜の空き缶回収機（エコ・ステーション）は東京の早稲田商店街のころみを素直に取り入れたものであるのですが、今その早稲田商店街では、エコ・ステーションが教育的見地からみて素晴らしいということで全国の修学旅行が頻繁に見学を訪れているという新たな現象が起きています。

商店街の活動を学習の為に、見にくるということが今まであったのでしょうか？やはり楽しみながらリサイクルができるということは、かなりショッキングな提示の仕方だったようです。

さらに早稲田商店街では、このあとのフォローとしてその修学旅行生を宿泊させるべく、同地区内にあるホテルと提携して修学旅行生割引料金にしてもらい修学旅行の子供たちすら取り込んで早稲田の活気をだそうとしています。

修学旅行の本来の目的は、観光地の見物ではなく学習であるのですが、風光明媚は今後は、二の次のウリとなる可能性すら出てきそうな気配です。

人を来させる方法というのは、「観光」だけの特権ではなく、アイデアで人を招くことができるなんて、これこそ民間にしかできない荒技といったカンジで聞いててもものすごく気分がいいものでした。

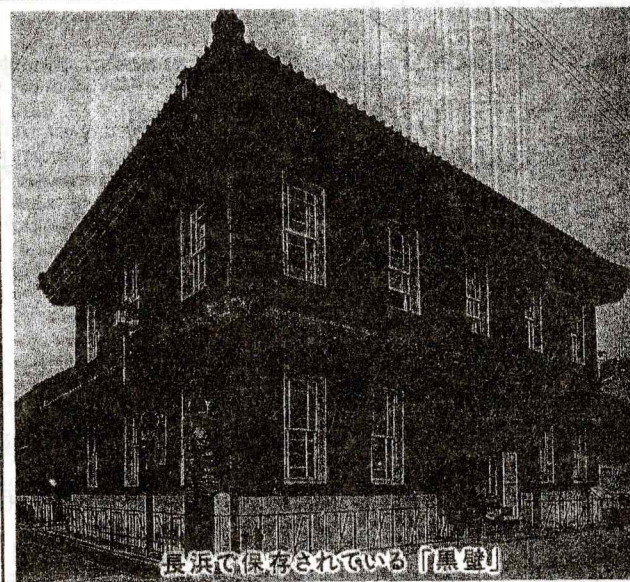
今回の視察ではいろんなことを考えさせられましたが、最近ではよく郊外の発展という言葉が使われます。郊外とは中心部があつての郊外です。中心部が機能しなくなればそれはもう「街」ではなく、郊外に中心が移ったということでしょう。

しかし日本中のなかで、へんぴな所に市役所や県庁がある所というのは聞いたことがありません。日本の歴史も考えてやはり中心市街地は、たとえ買い物でなくても文化とか、情報発信とかやはり人が集まる場所であり続けることが必要であり、少し大げさかもしれませんが、それが使命ではないかとも思えるのは私だけでしょうか？

「街」にはいろんな顔があつて、観光客が訪れる所や買い物をする所、市民のいこいの場所や住宅街と雑然としている面もありますが、ある程度の棲み分けがされていてなかなか魅力的な場所なのだと改めて感じられる、まだまだ捨ててはいけな場所のようです。

こんな「街」に対して、私たち「森岳まちづくりの会」のメンバーや島原を愛する人達は、『島原』に何をしてあげられるのでしょうか？

99.10.1「しまばら通信」
第108号 島原市内、深江・有明町 全世帯無料配布



長浜で保存されている「黒壁」

まちづくり 先進地視察考

松坂 昌應

仲間たちと琵琶湖畔の「彦根・長浜」を視察した。二つの城下町は「まちづくり」の先進地である。往復とも寝台車を利用、移動の車中も会議などに有効活用するという強行視察に二十人が

参加した。

森岳の私たちは現在あるもの（湧水、石垣、古い建物、そして町並み）を活かした「まちづくり」を考えている。こうしたものを残すことによって文化や歴史を伝え、人々が自分の町に愛着を感じ、誇りを持って住める町

てくる機械など苦しい台所事情の中でアイデアで話題をつくり、環境問題に取り組み姿に感銘を受けた。

長浜といえば「黒壁」である。黒い壁の趣のある古い建物を取り壊すのではなく、保存修復し、ガラス細工の店として活用し、観光客に

（生ゴミの肥料化など）しようと頑張っていた。

ずみ、一年前訪ねた伊勢神宮門前町の「赤福」を連想した。時代の流れの中で寂れていた街にお伊勢まいり華やかな頃の面影を再現する動きは一軒の饅頭屋さん「赤福」から始まり、今、大変な賑わいを取り戻している。「黒壁」「赤福」とくれば、次は森岳の「青い理髪館」で

環境問題をテーマに「黒壁」に「理髪館」を重ねる

にしたいと願っている。そこで今回のテーマは環境問題だ。四年前、街並み保存で訪問した彦根・長浜が再浮上した。

彦根では活気ある通りから外れ、寂れてしまった商店街の人たちが、空き缶を入れると景品チケットが出

口だった街が百八万人を集めるようになった。今、「黒壁」界隈は昔の街道筋の面影を大事にして大変な賑わいである。実は、ここまでは四年前の情報。その黒壁グループは今リサイクルショップ群を展開し、街なかのゴミ問題まで商品化

市民の声は手厳しい。「黒壁」保存に象徴される小さな民間投資の積み重ねが街をつくってきたのである。大型店の莫大な投資は、価格破壊の先に町を破壊してしまうことを賢い市民は知っている。私は「黒壁」の前にたた

ある。江戸から明治と森岳の歴史をつなぎ、私たちの時代を生きた大正十二年建築の大正ロマン漂う青い理髪館。瓦を落とし柱を傾けながら私たちの再生への情熱を待っている。私は「黒壁」に「理髪館」をオーバーラップさせながら、長浜の地を後にした。

●事実と真実

芥川龍之介に「藪の中」という短編がある。「羅生門」というものもある。黒澤明の映画に「羅生門」がある。実はこれ、芥川の「藪の中」が原作である。どんな話だったかよく覚えていないが、三船敏郎演ずる男と京マチ子演ずる女が、ヤブの中で、Hをしたとか殺人をしたとか、そんな話で、事実の一つなのに、男の言い分、女の言い分、巫女の声借りた死者の言い分？、聞いてみると全く正反対といってもいいぐらい、食い違っている。近いところと言えば横山ノックさんの手が、女子大生の胸の上だったか、局所の中だったか、はたまた逆に女性のほうがノックさんのモノをつかんでいたとか、嫌がっていたとか、喜んでいたりとか、そんな事でよく引き合いに出される話であります。

アメリカの小説に（マッカラズという作家だったと思うが）「心は孤独な旅人」というカッコイイタイトルの作品がある。オシ（って使っちゃいけない言葉なのかな）の…声のでない…主人公黒人ミックの所にはいろんな人たちがやって来る。彼は声が出ないから、人の話を聞くだけだ。やってきた人が勝手にミックの心を代弁し、会話？が進み、ミックのおかげで解決策を見つかったり、癒されたりして感謝される。自分が考えてもいないことを相手が押しつけて来てもミックはそれに抗弁もできない。そして事実と違うミックの偶像が出来上がる。やがてミックはそれでもいいかとか、ひょっとしたらそう考えていたのかなあなどと思ったりもする。そんな話だったと記憶している。

前置きが長くなったけれど、僕の関心事は自分を含めて「人の心」であります。「何を成したか」ではなくて「何を成そうとしたか」であります。説明を簡単にするには、『正しいか正しくないか・美しいか美しくないか・あるいは事実を時間順に並べる』定規で、話をすれば酒の肴には丁度よい。しかし真実はそう簡単ではない。【他人も自分も「儲かるか儲からないか」で行動している】などというお粗末な定規しか持たない人間は論外である。ひょっとしたらそういう人間も結構いるのかも知れないが、僕はそういう人間とはお友達にはなりたくない。実は、自分の考えていることさえハッキリとは分からない。

他人に「君は偉い」と言われようが「感心だね」と言われようが、「だらしない」「悪質だ」「軽率」「冷たい」「自分勝手」と言われようが、それは自分だって分からないのだから大きな問題ではない。事実の根っこにある「真実」（何を成そうとしたか・如何に生きるべきか）が大問題である。生きるべきか死すべきかそれが問題であるとハムレット松は大上段に構えて、以下、見てきた事実勝手に解釈をつけてレポートするものであります。愛していない女に死ぬまで「愛している」と言い続ければそれは真実であります。

●なぜ彦根長浜寝台車の旅なのか

移動時間を、ロスタイムと考えて、高いお金と引き換えになるべく短くしようとするか、移動時間も貴重な研修時間と考えるか。しかも翌日を朝から目一杯使う事、各自のペースで睡眠時間も確保できる格安の方法として、4年前も提案し実行した事を今回も確信を持って提案した次第。今回もやはり面白かった。修学旅行的な興奮もあって、ここで自分のペースを守れた者は少ないと思うが、睡眠不足の中、刺激的な一夜・さまざまな情報交換・楽しい歓談。ちなみにあかつき号に個室車両があることを教えてくれたのは商工観光課の高田君である。感謝。

用意した事前学習資料、全員が全ページに目を通してくれることは期待していない。その存在をアピール出来れば可。視察終了後録画ビデオを含めて何名もの方たちから資料の請求があった。用意した甲斐があったなと実感。実は、この反応は森岳まちづくりの会の単独事業の時より大きいと感じた。森岳の皆にとって2回目のマンネリがあったのでは？レポートも森岳が一番遅かった。

僕自身にマンネリや2回目の油断があったか？そういう意識は無いつもりだが随分予定していた項目を見落としていて、いつもポイントを押さえてくれる安藤君の不在が応えた。帰りの車中の元気な二十代を見るにつけ、もう若くないなと思ったり、しっかりペース配分をわきまえていてやはり元気な五、六十代を見ては、惑い多き「不惑の四十代」を実感した次第。

●女房役？中村さんの存在(彦根：登り町)

京都で立ち食いそば乗り換え、いきなり彦根。雨模様、猪原君また雨だよ。さあ研修だ。小椋さんはすごいなあ。その人柄、キャラクターにぴったりのあまり役だなあと思う。脇を固める中村さん、そして会議所の安達さん、この辺の連携に注目したい。ちょっと遅れてきた中村さんは(空き缶回収機の置いてある荒物屋さんの隣の引き出物屋さん)この日の資料に(大きく育ったケナフが花を咲かせた、その)花の写っている写真を入れ込むためにデジカメを持って走り回り、たくさんの資料にまさに花を添えてくれた。有り難い。見ず知らずの僕らのために。いくらパソコン使いが得意でもあれだけいろんなデータを残し、チケットの更新発行など毎日相当のエネルギーを割いているに違いない。その上に回収機付近の掃除。

●空き缶回収機持っていったいいですよ、貸します。

すごいと思う。思わず度肝を抜かれる小椋さんの発言。僕らのやる気を試すかのような挑戦発言。『本気じゃない視察はお断り』ということか。もし僕らが本気だったらどうす

るんだ！一瞬中村さんの顔が引きつったのを見逃さない。『もし、彼らが貸して下さいと言ったらどうするんですか？』しかしこれは、僕らが貸せと言うわけがないと多寡をくくっているのではない。小椋さんには勝算があったのだ。

空き缶を回収することが最終目的ではない。これは僕ら(特に小川君と僕)とて同じである。商店街内外に対する「環境宣言」であり、そのPR活動である。対外的にアピールし評価され、対内的に登り町商店街に(個店に)環境を大切にする意識を育てる事が目的だからだ。【あの雲仙普賢岳の災害から立ち上がろうとする島原の商店街の人たちが、登り町の取り組みに感銘を受け、空き缶回収機を導入する事になった。登り町はこれをイキに感じ、機械を一台貸すことになった。話を聞きつけた彦根市内の〇〇運送はその搬送を申し出た。：写真はトラックに機械を積み込む前で固く握手を交わす、島原の商店街の会長さんと、登り町小椋理事長】てな具合だ。双方マスコミの追い風にのって上手くいく。

ケナフとて同じである。何が何でもケナフなのではない。環境問題を身近に引き寄せる手段なのだ。翌朝、登り町の路上を箒で掃除しているおばちゃん(お姉さん)に遭遇した。元々そんな感心な人だったかも知れないが、この度の環境宣言がキッカケでそんな習慣が広がりつつあるんだったらこれはとてもいいことだ。役員レベルはあちこちで環境問題を説得するうちに禁煙にまで発展しているというから大したものだ。中村さんちはたばこも販売しているというのに。

●風呂屋のおじちゃんおばちゃんはおだやかで元気だった(夢京橋キャッスル通り)

4年前はまだ工事は半分だった。道路拡張の網がかかって、建築費用の追い風はあったものの、そこからさらに、1メートルセットバックを申し合わせあの街並みを実現したのは地道な努力だった。毎週「まちづくり通信」を発行し一軒一軒説得をし、自らも銭湯を廃業し、将来(街のあるべき方向)に合わせて、駄菓子やさんを始めたのである。50過ぎてからの決断だ。

4年前からするとお客さんがあふれかえり、ご夫婦で忙しそうに立ち働いていらっしやった。ゆっくり話を聞く時間もとれなかったが、前回しつこくせつついたので、ああ島原の写真屋さん！と覚えていて下さっていてうれしかった。アイスのケースに「あついきせつになりましたから、品物をえらんでからケースをあけてください」と小さい子供をしつけるような文言。娘に千代紙を購入したら、子供さんの折り紙にはもったいないからと安い方の品物を勧める始末。こだわりの北村さん健在である。僕はリピーターだけど歩道を歩くギャルたちはどうだろう。ともかくもこの通りは、規模的に森岳には参考にならぬと思っているから急ぎ足。

北村さんの駄菓子「たかざこ」の並びのお茶屋さん「政所園」、小椋さんの支店である。登り町の本店より遥かに広い。実はここ4年前も入っている。その時は誰彼かまわずお茶をどうぞと飲ませてくれていた。今回は、松下君と「私は小椋社長のお友達だ」と愛想のいい女店員に印籠を振りかざし、またもやお茶をごちそうになった。小椋さんの事情は知らないが、かたや近代的な通り、かたやさびれかけていた登り町、この辺の真実（何を成そうとしているのか）を聞いてみたいものだ。ちょっと遠いなあ。

●花しょうぶ通りの元気印

国宝彦根城もと欲張った上に、(島原の)文化会館から本丸に架けたらいいなという橋をチェックしていたら思わず知らず時間をとられ、花菖蒲通りをじっくり見られなかったのが心残りである。そもそも橋の上を歩くミニスカートの女性たちもいけないのである。どう思っかね長池クン。

花菖蒲の力石はまだ可能性を秘めつつ未整備であった。市のパンフレットだとあかり館みたいに行政の雇った店番が居っても良さそうだけどそうではなかった。忙しい店主たちでの運営は(掃除一つをとっても)大変だろう。学生さんがボランティアでいい雰囲気だったが。学生のいわゆるサークル室は汚いのが相場だから、ACTも含めて商店街のおばさんたちなどきれい好きが参加してはどうだろうか。

夜の交流会でこの若い会長さんがホントに元気でびっくりした。若い数人が定期的に集まっては作戦を練っているようだ。インターネットで連携をとっているらしいから、そう遠くないうちにここには割り込んでいくつもりだ。いかんせん僕のパソコン作戦は遅々として進まない。実はこの夜の交流会、ひとりひとりコメントをしたわけだけど、何か湊道の佐藤会長の話がよかったというか、あついものがこみ上げる感じがあったんだけど、どんな話だったっけ？頑張るぞと言う気になったわけです。

●さあ長濱だ！

しまばら通信で長濱を主体に書いたので、こちらはざっと流す。(64ページ参照)小倉さんの元気が続いてとりあえず一安心。それにしても吉井さんはすごかった。30分の講義がこんなに濃いのも珍しい。あれは5時間分ぐらいあった。吉井さんは役所の人間ではなく商店街側の(市民の側の)人だと強く感じた次第。もう一度会う必要があるな。

ゆう一番街の半分はアーケードのまま、半分は表参道の雰囲気而建て替え。この辺の話は実はじっくり聞くだけの価値があると思ったわけだが、入り込めなかった。抹茶アイスを売っていた愛想のいいお兄さんにインタビューしようとしたらお隣のおばさんたちが、逆にこちらを詮索する始末。ごめんなさい尻切れだけど本日これまで。ありがとう。



2000年1月25日 発行

限定 60部

森岳まちづくり印刷局

おそくなりました

